図書館の人と仕事

図書館に生きて

――阿部先生のこと――

青木四郎

阿部先生は長く本館の洋書主任を勤められ、昭和三十七年に在職のまま亡くなられた方である。それから三十年の歳月が流れて、先生を存じあげる方がしだいに少なくなってきたので、晩年の七年ほどをおそばにおいていただいた者として、私にこの題が与えられたものと思う。うかとお受けはしたものの、紙を展べて考えているうちに、先生の人とお仕事の奥行きが、そのお齢に近づいたいまもなお、私には容易に窺うことのできないものであることに思いいたらざるをえなかった。

先生ご自身は、自らを顕わすことを好まれぬお方であった。先生が存生のあかしとして残されたのは一冊の詩集だけであり、それをもってすべてとなさりたいお気持ちであった（詩集「迷子」校倉書房・昭三七）＊とするなら、私はここで筆をおくべきかもしれない。しかし、私もついには訪うことをやめるほかはない書庫の片隅に眠る詩集を想い、それがほかならぬこの図書館の歴史と生活の中から生まれたものであることを思うとき、その一巻のためにささやかな伝説を語るものがあってもよいのではないかと思い直した次第である。

阿部敬二先生が図書館に入られたのは、大正十五年二月とされている（詩集奥付）。それは前年の秋、新図書館（現在の本館）が竣工して、十月二十日におこなわれた開館式の感激もまだ醒めやらぬころであった。新ルネッサンス様式の明るく優雅なた

たずまいと、大玄関の柱廊から階段上部の壁画を仰ぐ空間の構成は、いかにも東西文化の接点というにふさわしく、当時学園の内外に大きなセンセイションをよびおこしたものである。館はこの新館落成を期して従来の業態を一新すべく、かねてからさまざまに検討をかさねていたが、その一つはいうまでもなく蔵書の充実であり、もう一つは分類表の改訂と目録体系の整備であった。

一歩足をふみいれればおのづから心の引き締まる壮大な閲覧室と、堅牢な耐震設計の書庫は用意されたものの、館にはそれを充たすべき本を購うお金がなかった。たまたまこのとき、小寺謙吉氏の寄贈してくださる社会科学系の洋書が、千七百冊余に達していたのである。

氏は大正十二年九月の関東大震災の直後から、学術の復興を願って東都の大学数校に図書の寄贈をはじめられ、とりわけ本館には、それから二十年ばかりの間に三万冊を越える大文庫を寄贈してくださることになるのだが、当時の洋書事情では、千七百冊(事務長日記)だけでも大変な恩恵である。新館の門出には願ってもない蔵儲であった。十月二十日の開館式に校賓として氏をお招きしたのは、これほどの寄贈に対する当然の栄誉礼であったが、同時にこれをきっかけとして学園の内外に新たな寄贈を呼びかけ、それによって書庫を充たそうという心づもりでもあった。いまも書庫の古い棚を見てゆくと、当時の先生がたのお名前を記した寄贈書がしきりに現れるのは、いかに多くの方々のご芳志によってこの図書館が育てられてきたかということの証しである。こうした寄贈書は、早速にも整理して閲覧に供するのが館としてご厚志にこたえるみちである。事実、小寺文庫の場合、そのはこびが迅速であったことが小寺氏の意に叶い、他大学をはるかにこえる招福となったといわれる。

しかし、このころの本館の態勢はまことに貧寒としたもので、洋書の担当者はわずかに一名、ときには林館長も手を添えているありさまだった。この本を特別に文庫として扱うためには独自の分類を考えなくてはならないし、館全体の目録を整備することも急がれる。そこで文学部から小山甫文先生を迎えて洋書係の充実をはかり、欧米の先進図書館の方法を研究することにした。それでもなお手不足であり、将来にそなえて後継者を養成する必要もあるというので、当時院生の阿部先生が吉江喬松先生の推薦で採用されることになった。二月から勤めにでられたというのは、こうした緊急の事情によるのであろう。

もう一つの大きな案件は、分類表の改訂であった。図書の分類体系が、長いあいだに学問の趨勢とかい離してゆくのはやむをえないことである。開設いらい三十年、本館の蔵書はかなりの規模に達して、配分の歪みがめだちはじめていた。館では市島顧問、田中理事、林館長らのもとに学部の人々を集めて検討を重ね、大正十四年三月には改訂分類表を発表したが、この新分類表を既収図書にも適用したので、夥しい転籍作業が生ずることになった。

毎日はいってくる新しい本の整理と平行して、古い帳簿を書き換え、目録カードと現物の分類記号・番号を訂正し、さらにラベルを貼りかえる……その忙しさは想像を絶するものであったらしい。労働基準法などという観念のない時代である。夏休みを返上したというが、それだけですむはずがない。残業につぐ残業の毎日であった。

こうして、阿部先生のはいってゆかれる図書館には、はなやかな新興の気運のかげに山積する業務が待ち構えていたのである。

「阿部君には苦労させました」小山先生は、私が阿部先生のもとで働いていることにいつからか気づかれたらしく、顔さえ見ればそうおっしゃるようになった。「あのときはしかたがなかったのです」。しかしお話はそれだけで、それがどんな苦労であったのか、お二人ともついぞ語ろうとはなさらなかった。

当事者は語らなくても、残された仕事から先人たちの凝らした工夫を読み取ることはできる。分類をあまり精密にしなかったのは、細かければそれだけ適用に苦しむからである。或る人はバラの花を主題にして、九七五のカテゴリーを数えることができるといったが、分類にたいする人々の見解はそれだけバラつくわけだから、細かくすれば利用者が検索するのにも行き違いが多くなるわけである。目録の種類を制限したのも、すべての記述を簡略化したのも、貧しい図書館が少しでも事務負担を軽減するためであった。標準的な図書館学の教科書の目からすると、これらは少々異様にみえるらしい。しかし、それで十分用はたりるという考えであったのだ。洋書目録は英米の先進図書館のものを参考にした(小山先生談)と伺ったが、簡にして要を得るという点はBMのそれに似ている。カード目録のかさを減らすには、一定量に達したところで冊子目録に切り替えて、閲覧カードを廃棄する。その準備として、印刷用の原稿を日常の整理と同時に作って貯えておく。こうした準備を欠いた多く

の図書館が、本のふえるにつれてカード箱の置場に窮するようになり、冊子目録の発行もままならず、あるいは流行にのって十進分類を採用したために、書庫の収容能力をいちぢるしく低下させるなど、いくつかの例を見るごとに、この館創業の人々の見識を思わないわけにゆかない。原始的などといって笑う人もいる受入順の請求番号が、実はもっとも実務的であることも、本の数が多くなってはじめてわかることである。これらの設計がすべて小山先生から出ているというのではない。状況から推測して、それまでに積み重ねられてきた経験と研究が、小山先生のところでまとめられ、阿部先生に引き継がれたと考えられるのである。阿部先生は誰が何をしたという話をけっしてなさらぬお方であった。

私が洋書係にはいったとき、阿部先生から与えられた仕事上の指示は、「オールラウンドに仕事をして下さい」という一言だけだった。「雑巾がけからやりなおす」ということばが流行ったことがあるが、ここでは常に皆が雑巾がけをすることになっていて、それはそのまま、阿部先生が入館以来歩んでこられた道にちがいなかった。

先生は入館されるとすぐに閲覧係に配属された。新規採用者に書庫のなかを隅ずみまで歩かせ、いろいろな本をまんべんなく手にとることで書物の世界に目を開かせようというのが本館の伝統的な教育方針であった。洋書係に移ってからは、重複調べ、カードの複製、帳簿記入、ページ切り、蔵書印・分類記号・隠印の捺印、ラベル貼り、本運び、閲覧カードの繰入という平常の業務のほかに、例の厖大な転籍作業に追い使われたことであろう。昭和十年、小山先生が文学部にもどられた後、洋書主任となり、その後度々人の出入りはあっても、先生は一貫してその席を守ってこられた。戦争中から戦後にかけて、まったく一人になってしまわれた時期もあったと聞いている。私が図書館にはいったばかりのころ、貸出台に座っていると、本を運ぶ娘さんたちの後ろから、同じように本を抱えた先生が、大きな体を屈めながら、書庫にはいる階段を窮屈そうに昇って来られるのが見えたものである。若い人手がふえてからも、ともすればそういう作業に加わろうとなさる先生であった。

先生のおそばで見習いをさせていただくうちに気がついて、敬服せずにいられなかったのは、じつにいろいろな国のことばを読みこなしていらっしゃることであった。洋書係というからには当然といってしまえばそれまでだが、いつそれを勉強なさ

ったものか。忙しい一日が終ったあと、いくらも残らぬご自分の時間をそれにあてたとしか考えられないのだが。

小寺文庫の内訳は英書がもっとも多く六割程度、独・仏書がそれにつぐ。その整理は昭和二十年ころまでかかったが、その後も特徴のある文庫が次々に寄贈されて本館の書架をいろどった。

片上先生のロシア文学のコレクションは我が国で手に入れ難いものが多く、そのむきの人に重宝されているが、大半は先生のお手で整理されたもので、原簿の数十ページにわたって、やわらかく、のびやかな先生の筆跡をみることができる。そのほか、部数は少なくても、オランダの本があり、古典語、ロマンス語の本がはいってくる。ことばの種類だけでなく、内容の面から見てもじつに多方面にわたる本が先生の手をとおっていった。小倉文庫は数学のコレクション、ロックフェラー財団の寄贈書は現代英米哲学のコレクションである。また、大学の中央図書館としての立場上、各学部の選定する本を購入する割当予算というものがあって、人文・社会のほかに理工学系の本も本館を経由していたから、その方面の最近の理論書や技術書も、一通り理解することを求められたのである。——或るとき、ドイツ語で書かれた新しい理学書を持った方がみえて、先生に読み下しをお願いしたことがある。先生は素人ですからと遠慮なさったが、一度ご自分の手もとを通った本とあってはお断りもならず、指定の箇所をしばらく読みすすむと、やがてその客人は「ああ、それでわかりました、それで私の計算とあいます」と、はればれとした声でお礼を申し述べられたのである。

先生は、こうしたもろもろの本を一手にひきうけて、繁忙期には月に三百冊も整理しておられた。

熟練のお仕事だから、たいていの本は流れるように捌いてゆかれる。まれに、一冊の本に長い時間をかけて、じっと読み耽られるのは、何か難しい内容であるらしかった。

「この本の分類で呻吟しているところですっておっしゃったんだけれど、呻吟はおおげさですよね」と、或るときふと先生がおっしゃった。「どなたがですか」。それは小山先生だということだったが、先生が人の名前を出されたのは、後にも先にもそのときだけである。笑いばなしのようにおっしゃっていても、その苦しみはほかならぬご自分の苦しみであり、なればこそ月日とともに深まる想いがあったのに相違ない。

「本なんて、ほんとは分類できるものではありません、便宜的

にそうするだけです」ともおっしゃった。何気なく聞き過ごしていたが、そこには大切な意味が含まれていたのだ。便宜的なものであるということは、それぞれの図書館の歴史や目的、蔵書の規模によって分類は違ったものになるということであり、また一面、絶対的基準がないということから、人が自分の見解に固執すれば、担当者が変わるごとに分類の流れが変わって、結果は分類をしないのと同じことになるか、たえず分類をやり直すことになりかねないということである。その危険を回避するためには、常に前例というものを念頭におかなくてはならない。書庫のなかを歩き回って、多くの本のロケーションを体で知っておくことの意味が、そこにあった。同様にして、貸出台にいて学生たちの読む本に通じておくことも、閲覧カードを繰り入れることも、生きた機能としてカタローギングを理解する事につながっていたのである。

本館の洋書目録の特徴は、件名索引を作っている点にある。分類はむしろおおまかなのがいいとしても、件名はその本の内容を端的にあらわすものだから、正確な読みとりがなくてはならない。参考書として、英書のためにはキュムラチヴ・インデックスがあり、のちにはLCの目録が出版されて、どこの国の本であろうとそこに搭載されていれば、その分類と件名を参考にして能率を稼ぐことができるようになったが、そういうもののない時代に、いろいろな学問分野にまたがって、この作業をお一人で続けるには、大変な心労がおありだったはずである。タイトルページが読めれば何とかなるというくらいの安易な気持ちでこの仕事に取組んだ私は、たちまち壁に突き当たり、あやうくノイローゼに陥りかけた。そんな私をそれとなく見ておられたのか、先生は或る日、ふさぎこんでいる私にそっと近づかれて、「本に負けてどうするか」と低声で耳のなかへお叱りになったものである。座りこもうとする私を引き立ててくださったそのことばは、先生が長い図書館生活のあいだ、じっと胸に嚙みしめてこられたことばに違いなかった。

かつて図書館では「広く浅く」というモットーがなんとなく通用していた。しかし、浅い知識というものがほんとうにその人を生かす力になるだろうか。そして、ことばでもことがらでも、よくわからないことをとりとめもなく追い続けるほど、精神を害することはない。してみると、近ごろのように、出版社が分類をしてくれるというのは、ある意味では合理的なことかもしれない。やがて機械が翻訳をしてくれて、オンラインがど

こからでも情報を持ってきてくれるとなれば、阿部先生のような方がかつて払われた努力と忍耐は、誰にも信じられぬ昔話のようなものになってしまうだろう。じっさい、その頃でさえ、洋書整理は参考書を写せばよいのだから楽だとか、誰がやっても同じだなどと、浅薄な認識を語る人がいた。まれにその苦辛を察する人がいても、それだけの努力を一筋の道に傾注すれば、きっとすぐれた業績を作れたでしょうに、などというほうへ話はそれてしまうのである。小山先生のいたわりのことばの底にも、それはあったかもしれない。しかし、総合的な視野をもつことが相変わらず大切だということになると、阿部先生のようにあらゆる分野の本を一手に引受け、緩慢な手作業の繰り返しによって一冊一冊を心に刻み付けていった時代というものが、やはり尊く思われるのである。いずれもとあれ、阿部先生はそういう時代を誠実に生きぬいたお方であった。そのあいだ、下世話の取沙汰がお耳に届いたのかどうか、「世間は形のないものには支払わない」という、エルヴェシウスの箴言を、こともなげに言ってのけるお方でもあった。「私たちのような者がいて、ちょうどいいのです。皆が欲しがったら、世の中はどうなってしまうでしょう」とも。

阿部先生の脇机の上には、国内・国外の出版社や取次店から送られてくる新刊や古書の目録が堆く積まれていた。それに目を通すのも先生のお仕事であった。とくに、外国からくる目録は、やがて将来される図書資料の内容を検討し、適正な価格を承知しておくうえでおろそかにできないものである。その準備がないと、業者の供給するものだけを言い値で買わされることになってしまう。阿部先生が歴代館長の信頼を受けて、図書購入を裁量しておられたのは、長い間の丹念なカタローギングのつみかさねと、こうした目立たない準備があってのことである。勿論先生は、裁量を委ねられたからといって、ご自分で何でもわかるかのような錯覚をおこされる方ではなかった。さまざまな本を見分けるうえで、どんな資料を参照すべきか、どんな研究者にコンタクトすべきかということを、口にこそせね、よくご存じだったのである。

図書館ではじめて紀要を発行することになって、そのためのアンケートがおこなわれたとき、「質実で実証された研究だけを掲載されることを希望します」とお答えになっているが、この短い一言で先生の書物に接するお気持はつくされているといえよう。後に先生が病床に臥されたとき、「本の選択をお願い

する方がいなくなってしまった」と嘆く館長のことばをそのままお伝えすると、「私の仕事に、そのような……」と言いさしたまま、しばらく絶句しておられた。ご自分の死期が近いことをさとられたときに伝えられた知己のことばを、先生はどのような思いで受けとめられたことであろう。（先生が副館長となって洋書係をはなれたのち、このカタログをファイルする仕事は図書選択の仕事の一環として、重複調べの仕事とともに受入係に移された。ここで分掌をかえたのは、従来受入係と洋書係の間を往復していた本の流れを片流れにすることによって整理の効率化をはかったものと記憶するが、それはまた別の話題である。）

こうして、阿部先生のお仕事は小数の心ある人には正しく評価されていたものの、それが一般的な理解となるにはほど遠い状態だった。事は図書館だけにとどまらない。確かな事実認識に心を用いようとしないのが、日本の精神的風土というものであった。

先生のお若いころ、大正昭和にかけては、啄木のいわゆる閉塞の時代で、若者たちの胸には革命ということばがあやしくゆれていた。フランス文学の研究者として、当然先生はそのことを視野のうちにいれておられた。人に問われて、フランス革命のあたりが「おもしろい」と答えていらしたことがある。しかし先生は、社会の構造よりは人の心の構造により深い関心を抱くモラリストであられたようである。ヒロイズムに導かれた思想がどんな災いを生みだしたかということを考えれば、「おもしろい」ということばには憚りがある。先生はそれを口籠もるようにしていわれた。「チエホフは或時」という詩はずっと後年の作であるが、そのなかにヒロイズムを拒否する姿勢が見えるのは、先生の初期から一貫するものと言ってよい。

時代は大きく右に旋回して、軍国主義の大波は誰にも逆らえぬ力となって戦争になだれこんでいった。十二月八日、学生入口の壁に寄りかかって「ああ、これで日本もおしまいだ」と、呟いた先生のことばは、日ごろ無口であるだけに、いっそう深い印象を傍の人に残したのである。先生が「しばしば率直端的に所信を打ちあけ」られたという山内義雄先生のことば（詩集序）も、それと同じ文脈にむすばれていよう。しかし、こうした人々が何をどう考えようと、時勢を動かす力にはなりえなかった。忍耐も努力もはてしなく吸いとってやまない砂漠のような状況に、先生もときには風に向かって叫び、海底の魚に呼び

かけたいお気持ち（詩・「陸風」）になられたらしい。それでもなお、「絶対絶命の境地」に静寂の美をみすえようとする先生のような方には、図書館というところはうってつけの職場であるともいえた。阿部先生お一人にかぎらない。ここが無抵抗の抵抗を保証する場であったことは、権力の禁書探索に応じなかったこの図書館のプライドとして記憶に残っているのである。

地獄の釜の蓋があくという。それはまさに、戦争の終結を知ったときの私達の気持ちであった。しかし、安堵の胸を撫でおろしたのはそのときだけで、続いてやってきた飢餓と政情の不安は、またしても私たちをさいげんのない暗いいらだちのなかに引きずりこんだ。「戦争に勝っていたら、もっとひどいことになっていたでしょうね、あの軍人どもがいつまでも威張っていて……」という先生のことばは、僅かな慰めになりはしても、それで未来がひらけるという気にはなれなかった。そんな私の思いこぼれた訴えを、先生は心からやさしく受けとめてくださった。

——様、お返事に。

二十五歳から五十歳位まで、私はスタンダールの音楽——けっして妥協しないデモンの大風——によって俗流の、甘い、危険のない、なまぬるい、なれあいの瘴気のなかを、どうにかきりぬけてきた。そして五十歳ころ、突如モオツアルトに眼が開き、（ああ、ほんとに何という晩熟！）それ以来モオツアルトを聞く時間が、一番生きている時間となった。そして私の紋章をＭＳＢと決定した。

……

Ｍ　モオツアルト　　Ｓ　スタンダール

Ｂ　バッハ

ここで先生はＭＳＢとおっしゃっているが、それは先生の実印ではない。ほんとうはＭＳＡ、つまり戦後の一時期、日本をささえた Mutual Security Agreement のパロディで、Ａはアルコールであった。そのＡをＢに代えたのは、アルコールをまったく嗜まない私にお気兼ねをなさったのと、バッハひとすじであったそのころの私におつきあいくださったのである。お酒がわかる人には、世の中にこれよりよいものはない、と、しみじみおっしゃっているのが聞えてきたし、事実、いったん先生のお酒がはじまると、それは天下ご免、一週間は続くものと

きまっていた。それには醒めぎわさえなければ、の但書きがついていたのである。あるとき、私が人間関係について不覚の愚痴をこぼしたところ、先生はそのことについては何もお答えにならず、人を裏切るよりは飲んだくれているほうがいい、と、ぽつりとおっしゃった。その一言は、いまも深く私を愧じいらせずにはおかない。

このころ、先生の関心はすでにモオツアルトに傾いていらしたからであろうか、スタンダールを話題になさることはなかった。いや、もっとも深い心を開いて下さったのに、その上なにを望むことがあろう。先生は、ご自分の説を喋々して、スタンダールを覆うようなことはなさらなかった。その心があるならば、人は自ら赴いてその目でみるがよい。そのため先生は、スタンダールの作品の中から難しくて他の人が手をつけようとしないものを選んで翻訳しておられる。「アンリ・ブリュラール」は幸い出版社がついて版をかさねた。この版に感謝している後輩研究者のことばが、私の耳にもはいっている。「ロッシーニ伝」と「一漫遊家の日誌」は、時節にあわなかったのであろうか、ついに刊行されなかった。後者が別人の訳ではじめて刊行されたのは一九七一年である。スタンダールが将来されてから

すでに半世紀以上たっていることを思えば、この翻訳がいかに難事業であったかが察せられよう。初めに私は、先生のお形見は詩集一巻だけであると書いたが、それは翻訳をもって業績と認めない世間の俗説を憚ったにすぎない。刊行の見込みのあるなしも思わず、二千枚になんなんとする大作を業余に訳しておられる、この一事をもってしても、先生の志のほどが窺われるというものである。

先生がスタンダールをどのようにお読みになったかは、「偉大な粗忽者」という詩一編が端的に語っている。それは各節のはじめに「赤と黒」からスタンダールのことばを引用し、それに先生自身のことばを対位法的に組み合わせた五行三連の詩で、先生が「デモンの大風のような音楽」と評されたスタンダールにいかにもふさわしい頌歌である。

「敬愛する人物の前に居る時
私の全自我は消去ってしまふ」
自我の消滅するのはその時だけで
額の中に鏡がひかってゐる
偉大な粗忽者スタンダール

一節だけの引用であるが、それでもスタンダールの真骨頂が簡潔に、しかも楽しく描きだされていることがおわかりいただけよう。

もちろん先生は、ご自分のスタンダール観が自己満足に陥っていないかという反省を怠りはされなかった。スタンダール研究の専門誌、「スタンダール・クラブ」が本館に架蔵されているのは先生の選定であるが、先生はその主宰者、デル・リットウ博士と文通を重ねておられた。あるとき、フランスからの書状を机上にお届けすると、先生はそれを読み終えられた後もしばらくじっと黙想に耽るご様子だったが、そのとき、はしなくも私は、ずっと以前にこの方をお見かけしたことがあるのに気づいた。なんという迂闊さであろう。もう十年にもなるであろうか、偶然ある場所にいあわせて、どこのなにをなさる方とも存じ上げず、まして後日上司として仰ぐことになろうとは思いもよらず、ただそのお顔にみちているふしぎな平安にひきいれられ、我を忘れてみとれたことがあったのだ。そのことは前に一度書いた(「園」三十八号別冊)ので繰返しを避けるけれども、今、手紙を読み終えて黙想する先生のお顔に、あのときと同じ表情があらわれているのを見たのである。おそらくそこには、はるかな国に友をもつという、あの論語の説く悦びがあったのにちがいない。その手紙の文面にあえてたちいってお伺いする厚かましさをもたなかったことが、いまにして悔やまれるのである。

先生が音楽に深い造詣をおもちであることが次第に人に知られるようになったのは、或る年の雨で街の一角がすっかり水浸しになったのがきっかけであったかもしれない。軒並み床上に浸水して、雨戸をたてることもできず、憂鬱な夜をもてあましている人々の耳に、モオツアルトの音楽が聞こえてきた。先生が押入の中段にあがって、蓄音器のハンドルを回していらしたのである。その話を聞き伝えた誰かが先生に水をむけたのか、珍しくも先生が先立って「モオツアルトを聴く会」を作り、週に一度、愛蔵のレコードを聞かせてくださるようになった。もっとも、人に促されるまでもなく、すぐれた芸術が一人の独占を許さないものであったのかもしれない。初めは洋書係の懇親会のようなもので、横文字の仕事をするところから「クラブ・クラブ」と名付けたのは先生一流のユーモアであった。後には二十人ほど集まって鶴巻町の喫茶店を借り、コーヒーとカステラで土曜日の午後の一時を過ごすのが、当時の図書館勤めのオ

アシスであった。LPというものが出まわりはじめたが、私たちには手の届かぬ貴重品であった頃である。エリーゼという店の名前も嬉しくて、横の木戸口に水野葉舟の表札が古びてかかっていたことまで懐かしく思いだされる。曲はモオツアルトのピアノ協奏曲の二十番台を連続して聞かせていただいた。先生は終始姿勢をただし、冥目したまま聞き耽って、鑑賞批評などはなさらなかったが、席を替えるとその類のことを漏らされることもあったらしい。(1)

「不協和音カルテットには全くやられましたよ。ああなると音楽じゃなくて、人間の内面の色々な情感や思想や、その他摑みどころのないものを、そのまま音で描いた手記とでもいいたい！　あれこそほんものの芸術美ですよ！」

「ケッヘル五一五の五重奏曲をきいてきました！　実に深く美しい！　自然と技巧と変化と……それから簡素で、情緒的で、しかも溺れず、構成的で機械化されず、一節一節に深い暗示があるんですよ……とかなんとかいうとモオツアルトがだいなしかナ」

（ハンス・カンのピアノ演奏会（昭和36・6・6）のプログラムに）

「これを私は1920年頃発見してゐましたが、今夜はじめて全く感服しました。（他の作曲家が影うすくみえる位）」

4・ロンド　バルトーク

三つの民謡

ルーマニア舞曲

しかし、その類のことばを口にされたとたん、たぶん先生は苦いおもいを味わわれたことであろう。もっとも深い感動は、もっとも痛切に伝達を願うものでありながら、それがことばに替った瞬間にもとの輝きを失ってしまうものであるからだ。

恋人よ　黙ってゐませう
ことばは　むくつけきものです　（「セレナード」）

先生の本意は己を虚しくして人生の真相をみきわめることにあり、肩書きや栄達にはなかった。人を扱うよりは本を扱うほうがいい、とかねがねおっしゃっていたから、副館長の地位に押しあげられて洋書係を去らねばならなくなったのは、組織の論理として観念はされたものの、まったく心にそまぬ成り行き

であったに違いない。「私にできる仕事を奪られてしまった」という嘆きが、家人を通して漏れてきたが、そのことばに何の他意もあるはずはなかった。

先生の洋書係は、管理というものの存在しないセクションであり、係りの者は先生のお仕事と人柄に、おのづから帰服していた。

三十年代に、「ぼくの伯父さん」という映画がかかったことがある。ジャック・タチの演ずる猫背ぎみの巨漢が主人公で、そののっそりとした後姿がかもしだすユーモアは、誰も彼もさかしげでせわしない世の中にたいする一服の清涼剤であったのだが、先生はすっかりそれに共感して、いまにも物真似をはじめそうな浮かれようであった。

尊大に構えて自分の存在を印象づけようというお気持ちもないから、先生の物腰はいつも温雅で、周囲の者になんの抵抗も感じさせなかった。或るとき、先生が一枚の紙片をふと差し出された。見ると、短い詩のようなものが書いてある。

戸を開けて　彼はそっと出て行く
林に吹く風は　モオツアルトのピアノ曲

そう思って見ていると、定時の鐘とともにそっと立ちあがり、風のように去って行かれる先生の後姿は、なんの未練げもないさわやかなものだったが、同時に、人が後を追うことをゆるさない、やんわりとした拒絶の雰囲気も伴っていた。そうやって人より一足はやく出て行かれるのは、「まだ誰も歩いていない道を」歩いて帰りたいからだと話してくださったことがある。私はそのことばから、新雪のおもてにはじめてシュプールを刻んで疾走するスキーヤーの姿を連想して、話題をアルピニズムのほうへ傾けたものである。そのころ私は先生に百篇になんなんとする詩作がおありだということをまだ存じあげなかった。いまその詩集を披くと、目立たぬように人環を縫って去ってゆく先生の後姿がほうふつとして浮かびあがってくる……

今日も一日、衣食の為に働いたが、いったん職場を離れれば、そのことは心になんの痕跡もとどめない。門口にはすでに妖精が待ちうけていて、非人情の旅に誘う。道端の石ころに話しかけ、天気のよい日には「どっこいしょ」と木の枝にとまり、雲の上を通って行く花車を見上げて時のたつのを忘れ、あるいははからずも無憂の花の咲き零れる山里に紛れこ

んで、門口に笑っているお花さんと顔をみかわし、或るときは泥の銭湯に浸ってよろこんでいる人々をみかけて、なぜでございますかお釈迦様、と問いかける……

こうしてわが家の門に帰りついたとき、その心に一番深く残っているものは「街角でみた青空の高さ」だけ……

やがて夜が深まるにつれ、胡座する詩人の心からもろもろの物の影が薄れてゆき、さいごに残った青空とともに「我」さえも消え去ろうとする一瞬、光鳥のように飛びすぎるものがあって、寂莫とした雪原のようなところに、虚空そのままのほほえみをうかべたモオツアルトがすっきりとたっている……

これ以上拙いカデンツァをつけて、せっかくの作品をだいなしにすることはやめよう。ここには、市井の一隅にさりげなく生きながら、心に高い青空をいだく東洋の隠士たちの操守がある。奔放に飛翔する西洋の楽匠の、精神の自在がある。その知性は鋭く、感性はかぎりなく優しい。詩人の没後、はじめてこの詩集を読んだ人々は、まことにこのような人がいたのだということを知って深い驚きにうたれた。

図書館の人と仕事

尾崎喜八氏は、人生の路上でこの人とすれちがって会えなかったことを痛く嘆き、懇篤な追悼文を書いておられる（「初冬の日記から」サンケイ新聞夕刊、昭和三十七年十二月七日）。

山内義雄氏の序文も、よくその人を知る文章であるが、その山内氏に寄せられた金子光晴氏のはがきに、この詩集の読後感がある。

しばらく御無沙汰しています。一度お目にかかって往事を語りたく思っています　死ぬまでに幾度会えるか。大兄の序文の「迷子」をよんでいます。あのへんが日本の詩の正しいありかたのやうにも思ふ　技法的にも洗レンされてゐる。著者が死なないうちだったらもっといいと思うが残念。奥さん御子息諸嬢諸氏によろしくお鶴声下さい

（三十七年十一月十四日付）

きびしい決意をもって己の存在を消し去ろうと望んだかにみえる先生が死の床についたとき、その心に「最後に残ったものはスタンダールでもモオツアルトでもなく、生涯にわたって書き綴ってきたこの詩稿であった」[2]。一人の詩友のすすめでこの

一巻が世に送られたとき、それは一瞬の光芒をはなって人々の眼を射たけれども、作者はすでにこの世の人ではなかった。詩人が安座した部屋の南面のフランス窓もすでにこぼたれて、詩集はその人自身かつて鬼哭啾啾と評した書庫の一角に眠っている。私とても来たり去る者の一人であることにかわりはないが、いましばらくはこの書架の前に佇んで、「一隅を照らす灯しびは国の宝である」といわれた古人のことばを献ずることにしたい。

＊詩「或自然法学者」は、無著者名古典の著者となることが先生の願いであったように読まれる。

「園」三八号別冊に寄せられた諸氏の追悼文のうち、木村寿(1)、内山義郎(2)両氏の文章からお言葉をお借りしました。記してお許しを願います。

（あおき　しろう　在職昭二六～四九）

当時の洋書係・整理について

澄山　暲

四十年余の前の話になります。昭和十五年春から一年ほど図書館につとめておりました。当時、たまたま父が天津に居りましたので、それを頼りに北支に渡り、中国海関の試験を受け中国の役人になりました。天津・北京と渡り歩き、北京在任中応召を受け、北支を転戦、開平の教育隊で中国語の教育を受けている時、終戦を迎えました。現地召集者は現地除隊で、一年足らずの軍隊生活から両親の居た天津に帰りました。日本租界に集結したわれわれは、衣類・装身具等を売り払って、食いつなぎ、帰国の順番を待ちました。敗戦の翌年昭和二十一年四月一日、米軍のＬＳＴに乗せられ、山口県の仙崎港に引揚げてきました。幸いなことに焼け残った目黒の家に落着きました。一年ほどブラブラしていましたが、再び図書館に奉職を願い出て、入れて貰いました。

昭和十五年頃、洋書係は阿部敬二さん、大瀧武さん、それに

タイピストの重光さんの三人でしたが、帰国後再度つとめた時は、古い方々は大分変っておられたようです。洋書係は阿部さん一人でやっておられたようで、私が加わり、間もなく天川登美さんが来られて、長い間三人でやっておりました。

当時の洋書係の業務の内容については、私なりに古い記憶を辿ってみますと、(1)目録作業　(2)分類作業　(3)件名作業の三項目に分けて考えられる。

(1)の目録作業は、ＡＬＡ及びＬＣの目録規則に準じて、図書資料の基本カードを作成する。但し、本館の慣習に従って規則の準用に多少の改変はある。

(2)の分類作業は、本館の分類表により、図書資料の内容を読解して分類する。分類に当っては、ＬＣ及びＤＣの分類、或はＮＤＣ等の分類表を参考にする。

(3)の件名作業は、ＬＣの件名(Subject Headings)のコード(Code)に従って、図書資料の主題を撰定し、件名を決定する。

以上の(1)(2)(3)の作業を図書資料に対して行うのであるが、その為には、あらゆる外国語の読解力の必要はいうに及ばず、目録作業における正確な記述を行う為に、種々な参考図書を必要とする。例えば、辞書・人名辞典・地名辞典等々である。語学力の習得と共に参考図書類の使用に習熟する必要がある。つまり語学力と参考図書類の使用、即ち整理技術の習熟とが相俟って、(1)(2)(3)の作業が行われるのである。

基本カードを作成し、分類及び件名を与えた図書資料は洋書原簿により個々の番号が与えられる。

以上の作業が終って、原物と基本カードが目録編成係に送られる。目録編成係からは、その後基本カードに添えて分類カード一部が戻ってくる。

その後の作業として

(1)新加統計表の作成

(2)語国別新加統計表の作成

(3)基本カードの繰り入れ作業

(4)分類カードの繰り入れ作業

以上で整理業務は一応終る。その他の業務として

(1)図書資料選択に伴なう調査業務

(2)カタログ作成に関する業務

(3)洋書予算作成に対する資料調査等

であるが、洋書係としては主として資料の調査業務が依頼される。当時の洋書予算は、学部割当と本館分とが半々であったよ

うに記憶する。

以上かたくるしい整理について、大体のことを述べましたが、阿部さんは当時の洋書係の中でも生き字引的存在で、おひとりで何も彼もやられていました。私も半ばそのつもりでやっておりましたが、たまたま閲覧の仕事を頼まれた折に、誰でもが洋書整理をやって行けるようにと、若い方々に来て貰い、それも数を増やすことを提言したともおもいます。その後、徐々に学部出向の制度も行われるようになり、誰でもが洋書整理の業務にたづさわることが容易になったとおもいます。

約十八年ほど図書館のご厄介になり、社会科学研究所に移ったのは、昭和四十年頃だとおもいます。当時は、事務主任のもとに係が五ツか六ツほどあって運営されていました。図書館の組織は大学内での他との比較において、置き去りにされたような状態で、旧態依然とした姿でした。それで、ことある毎に図書館の組織化をお願いしてきましたが、私が図書館を離れる頃から少しづつ実施されるようになったと記憶します。時の流れというものが大いに作用しているのでしょうが、今後、更に、総合学術情報センターとして発展して行く姿を楽しみに眺めたいとおもいます。（すみやま　あきら　在職昭二二～四〇）

マイクロおよびレコード資料収集のはじまり

田口　親

昭和二十一年五月六日召集解除。五月六日大竹港から東京についた。学業途中で召集された私は文学部に復帰して一年間すごすことになった。論文を書くために図書館に通うことになった。私の定席は旧参考室（図書を出納する台の傍のあみばりの小さな空間）という所であった。漢文資料は一度に多量に持ち出すことから、その頃閲覧係におられた先輩桜井清彦（現在文学部教授）さんの計らいで書庫に入り、自分で本を運んで来てそれを読むことを許された。そんな時の或日、就職のための履歴書を桜井さんが早稲田大学図書館にと持っていってくれた。二十二年四月十五日頃から、私は図書館に学生職員として通い始めた。同年九月二十六日、三十四歳でようやく大学を卒業した私は、引続き図書館に就職することが出来た。本のある世界で生きようと思っていた私にとっては大いなる喜びであった。

或日、桜井さんにたのまれて写真の焼付けをすることになった。労務員室の裏の右側の倉庫の中に暗室があった。この暗室は宮川貞二事務主任の設けられたもので、戦前から写真の仕事をされた所である。複写の仕事はその時からあったことになる。水道もない、ただ流し台があるだけのもので、水はバケツで運ばなければならないようなものであった。この暗室も今は大きなものになり設備もととのっている。五時頃から焼付けをやって事務室へ入って行くと大塚芳忠事務主任がおられて「今頃まで何をやっておられたのですか」といわれた。時計はもう九時を過ぎていた。そこで暗室のあること、写真の仕事が出来ることを話した。この時から大塚事務主任の頭の中にマイクロシステムに付いての考えが出来上っていったのであろう。ちょうど（二十三年五月頃）池田政敏君（昭和三十二年七月六日死去）が入って来た。池田君は音楽史が専門ということで、話が視聴覚資料のことになっていった。そして今の文献復写室の所に視聴覚室が設けられた。中の入口に近い所に防音室（一坪位）が作られ、テープレコーダーと電気蓄音機がそなえられた。その外の所が撮影室で、写真機はコニカで、柱が四本あって下にB4位の枠がついた一定の大きさしか撮れないものであった。大きなものは三脚を立てて撮った。そんな中で、本居宣長の『古事記伝』を複写するために、池田君と私は松坂の「すずのや」をたずねた。写真機は大隈研究室が買いたての、たしかミノルタ一眼レフであったと思うがそれを借りて出掛けた。フイルムは映画用のフイルムで、三十五ミリ、三十六枚どりであったから、フイルムを送るのに指で廻すので、親指に豆が出来るといった苦労をした。その頃の夢は自作のスライド、自作の映画、文献の復写による収集、テープによるなくなりゆく音の収集と、同じく古いレコードの収集であった。池田君はスライドで音楽史を作り、それにその時の音楽を吹きこんでみたいものと言っていたが、早くこの世を去ってしまった。

昭和三十年頃には、私はこの係にはおらず、遠藤雅司君と小岩井衆君の時代となった。昭和三十二年の暮と思うが、故池田君の提案であった「演歌」の録音が大野實雄館長と吉井篤雄事務主任の許可を得た。神長瞭月、宮島敬二（郁峯―早稲田出身とか）、田浦虎一、東富士雄の諸氏であった。世の中から無くなって行くであろうと思われる音を残そうと言う一つの方向であった。学内に有るレコードの収集、池田君と一緒に都内のレコード屋さんを歩き廻ってレコードを収集した。小岩井君は

「演歌」録音の後退職して、高橋正明君が入り、しばらくして、七号館に視聴覚室が設けられて、高橋君は七号館行き、文献復写と資料保管の仕事が本館に残って遠藤君が係であった。資料保管はしばらく参考室で行われていた。

私が閲覧課長を自ら退いて、マイクロ資料室の係を独立させ、山路広明さん、猪之原菖子さんと仕事をした。場所は旧館長室（今の洋書整理室の一角）に移り、その後十三号館に移った。自分の言い出した仕事で最後をかざれたことは大いな喜びであった。私は極く初めの所しかやっていないので、その後は後任の方にきくことにより、もっと多くの詳しいことが出て来ると思う。

現在「明治期資料マイクロ化事業室」が設立されて、全国にある明治期の文献のマイクロ化が進んでいると言う。誠に時の流れの早さを感じる。

（たぐち　ちかし　在職昭二二～五五）

特別資料室のはじまり

柴田光彦

一

法学部の大野実雄教授が図書館長に就任されたのが、昭和三十三年十月のことであった。新館長は大変意欲を示されて、発令前に図書館に見えられたりして話題を呼んでいた。当時、私は和漢書係の最末席にいたが、新館長が就任早々に特別書庫を視察されたということなどを漏れ聞いて、なんとなく期待感を抱いた。

翌春の館内の親睦誌「園」で、新館長を迎えての特集号「新館長にのぞむ」欄に各人各様の記事を寄せているが、私も匿名で、善本を集めてほしい、古書部を設けてほしい、研究的な方面を開発してほしいなどということを書いたことを覚えている。まさかそれが直接の切っ掛けではあるまいが、早速「早稲田大学図書館紀要」の創刊が実現されたのは驚くべきことであ

り、爾来私は続けて執筆するように心掛けた。

その後しばらくたった或る日、私は館長室に呼び出された。大野先生の手には一冊の本があった。それは『慶応義塾図書館蔵和漢書善本解題』(昭和三十三年刊)であり、同館の司書阿部隆一氏の努力になるものであった。(阿部氏は麻生太賀吉氏の創設された斯道文庫の主任であり、文庫とともに慶応の館員となり、その後附属研究所斯道文庫が設立されて移籍、やがて教授となり、文庫長になり、早稲田大学へも出講され、定年後名誉教授となられて間も無く急逝された。)

館長曰く、わが館でもこの様なものを作りたいが、ついてはおまえがその準備に取り掛かれという主旨であった。当時、天理図書館では『稀書目録　和漢書之部　第3』(昭和三十五年刊)の大冊も刊行されたばかりの時でもあった。

新米の私にお声が掛ったのは、新しく出発仕立ての私立大学図書館協会の関東部会の研究会の書誌学分科会の幹事にさせられていた私が、何かやらなければとつくりだした『図書館における貴重図書』(昭和三十三年刊)を、費用の関係で、当時館内の「図書館学研究会報」の謄写製版に関わっていた福田望氏に依頼して、会報には№13と14に別けて載せてもらい、一方でその抜刷りを合冊にした形のものを、表紙だけは印刷所に頼んで活版で刷り、書誌学分科会の名前で刊行したものがお目にとまり、また和漢書係に配属されて早々に担当した小倉文庫の整理の中で、古書市に出た寛永版『塵劫記』の新出本の入札購入を、生意気にも館長へ進言し、若干のやり取りがあったのをご記憶にとめてのことであったようであった。もっとも先代の原田実館長は専門の教育学の立場から稀書購入について、乏しい図書予算の中では厳しい姿勢をとっておられたが、それはそれなりに立派であったと思う。

早稲田大学の特別図書は、慶応や天理と違って、いわゆる普通図書(一般図書)と貴重書を分けてあるのではなく、勿論貴重書も含むけれど、普通書庫に収まらない全てのものを収納しているようであること。

また特別図書として特別の分類がしてあるわけではなく、和漢書・洋書・逐次刊行物、それぞれにおいて各分類の中で到着順につける請求番号に＊印をつけて区別しているもので、簡単に全貌が把握できないこと。

特別書庫の管理も三つの係の協同管理であり、比較的に和漢書が多いに過ぎぬこと。また普通図書の中にもかなりの善本が

あり、特別図書の中にも善本らしからぬものもあるらしきこと。

和装古書は慶応や内閣文庫・都立中央図書館などのように、洋装の新書と区別し別置すべきであること。

また、慶応もさることながら、天理においては司書研究員の中村幸彦・木村三四吾教授をはじめ錚々たる方達の執筆であり、わが館においては先頃和漢書主任を退いて文学部の教員に転出され、その後副館長になられた洞富雄先生くらいで、我等ごときは特別書庫内のごみ掃除しかできぬであろうことを申し上げたところ、それは先刻承知である。君はそのごみ掃除をやってくれということで、私は和漢書係に属しながら専ら特別図書に関わるようになった。

二

しかし特別図書の専属ということではなく、和漢書の遊軍のような立場で、溜まり本や文庫本などの仕事をやりながら、特別書庫の整備に取り掛かった。その間、澤本君恵・荻野隆恵・酒井清氏等の協力を得て、仮目録の作成や帙の発注、それから、特別書庫内での資料の山積を解決するためにはどうしても書庫の拡張が必要で、館長の肝入りでどうにか二室を確保でき、資料の大移動を行った。仮目録が一応出来た時点で館長に報告したところ、これを印刷に廻すといわれたので、そのような性質のものでなく、さらに選別した上でなければ、貴重書目録の体をなさぬ旨を進言して、思い止まっていただいた。

当初は製本費は雑誌の合本専用のもので、帙一つ作る予算とてなく、また勿体ないという意見も強く、佐久間和三郎事務長と議論を交わしたことも、溜まっていた錦絵版画の整理にあたり、畳紙の発注をめぐってこれまた館長室の会議の結果を待たねばならなかったことや、書庫内に古新聞紙にくるんだままになっていた古写経の修補を申し出て、大野館長に果してそれに値するものや否やを問われ、その価値を力説し、目録の記述の誤りを指摘したりして漸く許しを得て、宮内庁書陵部の遠藤諦之輔氏の許に持参、余勢を駆って、洋書の修補もと思ったところ、大槻文庫の一冊を仕上げた後、自分は元来和書が専門であるので、出来ないと思われてはとやったまでで、後は辞退したいと断られたことなど、氏亡き今は懐かしき思い出である。

また館内での古書修補の必要性を力説したところ、これには松本弘氏が持ち前の器用さと研究心を発揮して、学生アルバイ

トを仕込んだ。服部文庫の損傷が激しいゆえに放置されていた日記類を裏打ちして製本してまとめた努力は大きい。このたび整理一課長に着任の松下真也氏もまた製本に造詣あり、西垣文庫の装備に大いにその力を傾けた。ひと頃は特別資料室すなわち修補係のごとくにいわれた時もあったが、今はそのスペースもない。新図書館に修補の設備は用意されていないと聞くが、和古書の部門には必要欠くべからざるものである。どこの館でも組織や人材の面で問題はあろうが、埼玉県立古文書館あたりを参考にして、是非御一考願いたいものである。和古書の部門は、修補なくしては成り立たないといっても過言ではない。

また市島春城・會津八一先生旧蔵の鶏血石を安藤更生教授の媒介で入手、會津門下で篆刻の第一人者の山田正平先生に依頼して、貴重書のための「早稲田文庫」印を彫っていただいたのも大野館長のときであった。山田先生はその後続いて明治大学の蔵書印を彫られたが、間も無く病をえて長逝された。

特別書庫の名称はその儘であるが、準備作業室の命名についてはひともめした。特別資料室の案が決まりそうであったが、図書館学でいう特別資料とは図書以外の資料、すなわち視聴覚資料の群をさすのと紛らわしいという意見が通って、特殊資料室ということになった。

大野館長は、やがて昭和三十九年九月に、法学部長に選出されたために、図書館長を辞任され、教育学部の佐々木八郎教授が就任された。翌年四月になり、特殊資料室の名称を特別資料室と改称、参考室の担当であった閲覧も扱うようになり、特別閲覧室を持ち、古文書室も併せて一つの係の扱いとなった。その後二度程部屋の移動を経て今日に及んでいる。

三

宮内庁書陵部の図書調査官であられた文学部の伊地知鐵男教授が選書顧問になられた折に、今の目録からでは本の有無もわからぬとの御指摘を受けていたので、和漢古書の全貌をつかむべく、川上一管理課長の理解の許に、一夏コピー機をレンタルして、事務用カードから和装古書の分を抜き出してコピーして仕分けた。現武蔵野女子大学の田中善信教授やエクステンション・センターの村井由敬事務長が特別資料室に在籍していたころのことであった。

その後またしばらく経ってから、国書については木村壽・中村義人・大江令子氏によって『国書總目録』との照合、同書に

請求番号の書き込みを終えた。

これまで、いろいろと遠廻りを余儀無くされたが、このあとは国書古書目録・漢籍古書目録がまとまれば、やがてそろそろ大野先生の御命令の実行に取り掛かれるようになったかと思いはじめた折も折、思いがけなくも、私が図書館を去らねばならない事態が起きてしまった。（しかし、なお縁が切れず、客員の嘱託として今日に至っているが……。）

そして普通書庫の中で洋装本と和装本の別置を実現したのは、中村義人氏が特別資料室の主任になってからのことである。

いよいよ新図書館の着工間近いという。その竣工を記念すべく、奥島孝康現館長の獅子吼のもとに全館員参加による貴重書解題図録の企画が現在進行中と漏れ聞く。それは慶応や天理とは極めて異なるやり方のようではあるが、奥島氏は大野先生の高弟にあたる方であり、真に人と時宜を得ているといえよう。刊行が待ち望まれる所以である。

（しばた　みつひこ　在職昭三〇～五九）

昭和三十年ころの寄贈交換について

山路　廣明

早稲田大学図書館の寄贈交換事務は昭和二十五年以前から行われていた。最初は旧館時代雑誌係で雑誌の整理と共に兼務し、国内交換と国際交換とに分かれ、国内交換は和雑誌係で、国際交換は洋雑誌係が担当していた。

交換資料としては第一が学内刊行物、次が之を補うために外部から購入した図書であった。学内刊行物は最初は尽く和文のものばかりで、和文の比較的理解できる外国の大学や研究所へは躊躇なく送ることができたが、和文の研究があまり行われていない外国の機関に対しては先方からの要求がない場合、考慮して送らなければならなかった。これでも果して先方が満足するか否かは疑問であった。これらの諸外国の機関とは予め文書を通して意向を確める必要があり、これに対して何等意志表示のない場合には一方的な見積り交換となる。この点が国際交換の悩みの一つであった。この様な状態に対して交換係員として

は手の下し様がなかった。

やがて理工学部から英文の定期刊行物が発刊され、これが一つの救いとなった。

文書による外国の諸機関との交換で当学内の刊行物の書名、内容が理解し易いように和文のリストを英訳して送るようになった。実際問題として英文の学内刊行物の不足が悩みの種で、外部や市販の刊行物で英文のものを調べてみると、観光、スポーツ、趣味、娯楽等のものが多く、学術研究機関にとっては凡そ不向きなものばかりで、これらを交換資料として取扱うことはできなかった。

ここでもう一つ考慮したのはバランスの問題で、これも今迄述べたことと重複するが、等価交換もさること乍ら、彼我刊行物の内容の均衡も計る必要があった。

以上は国際交換事務についての概略であるが、新館へ事務所が移ってからは寄贈交換係は和洋雑誌係から受入係へ編入された。

次に国内の寄贈交換については従前同様の形で分担があり、学内刊行物を中心として取扱っていた。

（附記―以上は国際交換事務についての概要であるが、国内交換については度々係員の交替もあり、直接担当しなかったため本文には述べなかった。）

（やまじ　ひろあき　在職昭二五～五〇）

撮影室の出来たころ、その経緯

遠藤　雅司

現在の撮影室（一階入口脇）に、ドイツ製の最新鋭機ルモープリントMTI型マイクロフィルム撮影機を設置、「視聴覚資料係」の名のもとに、本格的に複写業務を開始したのは昭和三十一年四月のことだった。

この「視聴覚資料係」は、レコード・テープ類の収集整理と、マイクロフィルムを利用活用して、①貴重図書の破損防止、②貴重文献資料の保存・蒐集、③図書・新聞の保存スペースの圧縮、④教員・学生等への文献複写サービス等を行う目的で新設された。

当時は、国産のマイクロフィルム撮影機が何種か発売されるようになり、マイクロフィルムの活用が急激に普及し始め、生

命保険会社、証券会社等の企業で盛んに利用されるようになった頃だったが、大学関係では、専用のマイクロフイルム撮影機を置き、本格的な複写業務を行っている所は殆どなく、大学図書館としてはトップを切って開始した業務だった。東京大学より半年早い発足と思う。

この「視聴覚資料係」が生れた経緯には、次のような事情があったと思う。

館内の有志の中から、このマイクロフイルムの特性を活用して、古文書等の貴重資料をマイクロフイルムで撮影して保存したり、入手困難な資料をマイクロフイルムで蒐集していこうという気運がではじめた。そこで、実績づくりのために、当時何らかの関係で撮影が可能だった、日英外交文書、古事記伝、馬琴自筆日記等を実験的に撮影したのが最初だった。実際に撮影などで苦労されたのが、写真の好きな田口親さん、桜井清彦さん、若くして亡くなられた池田政敏さん等の先輩諸氏だった。当初は、マイクロフイルム撮影機はもちろん、部屋もなく自分達の仕事が終わってから、夜遅くまで小型普通カメラを使って文献を撮影したり、時には出張撮影したりした。そのあと、撮影したフイルムの現像、CH印画紙（文献複写用の薄い引伸印画紙）に引伸する為の暗室作業も行い、マイクロ写真術の研鑽も兼ね、長い間自分を犠牲にして苦労され、諸種の要求の一端を満たしてきたが、初めは失敗の連続だった。この間の努力が少しづつ実を結んでいくつかの実績を作り、その実績が大学当局を動かしマイクロフイルム撮影機購入の動機を作り、さらにこの係の生れるきっかけを作ってくれたことは、「視聴覚資料係」の名前と共に忘れられない事実である。

当時、学生職員であった私は、クラブ活動の趣味を通して、現像から焼付に至る写真技術を一通りマスターしていたため、積極的にこれ等先輩達を応援して、よく撮影や暗室作業のお手伝いをしていた。

このように、学生時代から事実上の複写業務を行っていた私は、卒業後も、先輩達の推薦もあって大学に残ることになり、三十二年四月、専任職員として採用されると、直ちに「視聴覚資料係」に配属された。

この「視聴覚資料係」では、マイクロフイルム関係業務を私が、レコード・テープの蒐集整理等の業務を開設当初からおられた、小岩井衆さんという方が担当することになったが、私が就任するのを待つようにして数ケ月後に、突然退職されたのに

は大変戸惑った。

小岩井さんは、戦前、農民運動の指導者で、戦後は愛知大学の学長になられていたお父さんの若い頃の意思を継ぐようにして、労働運動の道に入られた。この方には公私にわたって大変お世話になったが現在消息が分らないのが残念だ。

この「視聴覚資料係」は、たしか、小岩井さんが退職された翌年、昭和三十三年四月、7号館移転計画が実現して、後任者も決まりレコード・テープ関係の業務をこちらに移し、本館の方は複写関係業務だけの現在のような体制になった。小岩井さんが退職前から構想していた、7号館移転計画は、その後、計画通り16ミリ映画が映写できる視聴覚教室、個人で音楽等を聞くことができる個人ブースが設置された。このように聴覚関係と複写関係の二箇所に分散したが、係名は「視聴覚資料係」のままであった。その後、分離して現在のように「文献複写係」が生れた。

係名の通り当初の業務は、貴重資料の撮影蒐集が主な目的で、利用者の文献複写サービスは余力が出た場合に行うことにしていたが、開始してみると現在のように簡単にできる複写機がない時代だったため、教員を中心とする依頼が殺到するようになり、結局は文献複写サービスが主な業務になってしまった。

マイクロフイルムの撮影機による文献複写は、縮小して複写ができるため、保存スペースが小さいという利点もあったが、肉眼で見ることができないため、印画紙に焼付けるか、リーダーで読むしか方法がなく、費用や手数が掛かるのが難点で学生には高嶺の花であった。

やがて、昭和四十年代になるとゼロックスの開発によって、大革命が起り、複写の形態は一変してしまった。このため、図書館の複写業務のあり方は大きく変わってしまったのは周知の通りである。

今日は、文献複写が何処でも極めて簡易迅速、安価にでき、世はコピー氾濫時代になった観がある。図書館利用者の間でも、コピー公害といわれるほど文献をコピーし、読み切れないほどの枚数をかかえこむという、昔では考えられない事態が生じてきている。三十年の歳月がすっかり様相を変えてしまった。本図書館で複写業務を開始したときには、予想もできなかったことである。

（えんどう　まさし　所沢図書課長）

当館の月報と紀要のことども

――その旧編集者として――

茂木堯秀

図書館は、その収集資料の悉くを、またそのサービス機能のすべてをPRし、利用者間に周知徹底せしめ、その活発な利用を促さなければならない――という、戦後の新しい図書館理念に基づいて、当館では、岡村千曳館長、大塚芳忠事務主任および館員たちが一丸となって乏しい予算の中を工面して、あえてザラ紙印刷の当館収書速報の第1号を発行したのであったが、それはまだひどい物資不足の中の昭和二十六年五月のことであった。すなわち、「早稲田大学図書館月報」の第1号で、当時、それは館界でも画期的な快挙であったにちがいない。

しかし、月々収蔵の和洋書、視聴覚資料の報知に加えて図書館だより、小書誌、馬琴日記翻刻などを併載、営々続けられたその後の発行も、印刷手段が活版印刷という手数入りのため、昭和三十三年にいたり、三十二年度末収蔵分を報知するや、その第40号をもって休刊の止むなきにいたってしまった。

一方、その頃、大日本印刷に発注されていた露文図書目録は、露文という悪条件も加わって組版と校正が暗礁に乗り上げており、わずかに、洋書目録の第4編第3分冊の校正が進行していた。第3分冊はその前の、第1、第2分冊に比して極端に頁数の少ない百四十頁ほどのもの。どうしてなのかと思うばかりの悠揚たる仙人編集ぶりのものだった。

こんなわけでか、図書館にも、編集力が必要とされ、総務係の一角に私の席が生まれることになった。そして、編集者常識の多機能性から、その後、職務表に六十種近くを記入するほどの仕事数を担当していくこととなった。

その昭和三十三年十月のこと、原田實館長から大野實雄館長に代られることとなった。

大野館長は代られるや、私の関係面では、まず休刊状態の図書館月報の復刊を命ぜられ、次いでは、当館でも、館員の手に成る図書館紀要なるものを発行せよ、と命ぜられ、館内にショックを走らせることになった。

三十三年度一年間の滞貨カードは、多数館員の連夜の残業作業により分類整理が行われ、和漢書カードは、これを和文タイプ打ちの謄写印刷に付し、製本の関係で2分冊に分け、翌三十

五年三月に三十三年度整理分年報として発行し、第3分冊とした洋書年報は、カードを排列して、当時始まっていた教務課のゼロックス製版印刷部を煩わして、安価な部内印刷本年報を作製したかに記憶しているが、これの発行は、和漢書より早く三十四年の十一月であった。

すなわち、右の年報3分冊を以て、月報第41号の(1)(2)(3)とし、次いで、三十四年四月整理分和洋書目録カードは、年報より先に、第42号として五月中に発行し、以下逐次、時には視聴覚資料目録を交えながら43、44、45号と月刊体勢を維持し続けて行くことになった。

ただし、活版印刷発行をやめて、教務課のゼロックス印刷部での、ワラ半紙印刷に活版印刷の表紙、目次を付ける、という安直月報ながら、それは非常な経費節約となっていた。

ただ、そのためには、タイプ打ち謄写印刷で複製されたカードを、排列盤上に根気よく、50頁、60頁分ずつも並べる作業が必要であり、かつ、マスター製版の時、図書館から五、六人ずつが、カードの縁影線消しに二、三日は出向かねばならない手数入りとなった厄介さがあった。

そのうち、教務課が音を上げ、日本青写真ＫＫへ、日本綜合印刷ＫＫへと仕事は移り、やがてプロセス製版オフセット印刷の上質紙印刷に替り、判型も正体Ｂ5判誌となった。そしてその後、月報は長期間、学内利用者から学外へも配付され、早大図書館の看板ともなったのであったが、なぜか今日、カードのワープロ製作が始まるや、昭和六十一年二月発行の第282号を最後に、早大図書館月報はその三十五年の歴史の幕を閉じることになったようである。電算端末機の登場のゆえなのか。しかし、旧人はやはり一抹の哀惜の情を禁じえない。

さて、もはや与えられた紙幅もない。図書館紀要のことを急ぐとしよう。

紀要発行のことを大野館長から迫られた館内では、早速会合がもたれ、書誌学系、図書館学系の館員による研究稿が暑中休暇明けを目指して募られることになった。

その頃、折よく館内では、館蔵・対英老中書翰の解読を行っているグループがあり、その解読に拍車がかかり、他にも予定提出者があり、休暇明けの原稿提出が待たれた。

私も日常業務の合間に、わが館の紀要なるものの、品位ある態様をいかに組み上げるべきか、模索に模索を重ね、創刊号への構想を固めつつあった。あとは提出原稿に即して、というと

ころであったが、いざ、実際に提出された原稿は、様々な姿のもの。頁区切りよく、条理を立てて、割り付けの妙をいささかでも納めようとするには、かなりの努力が要った。そして、ここで忘れることのできない協力者として、私の厄介な割付指定にも、その意地にかけて、いつの時でも果たしてくれた、親愛なるわが早稲田大学印刷所の、極めて高度な優れた技術陣の存在があったことを記さなければならない。文選・植字・製版・印刷・その他の、いつも親しく協力して頂いた諸氏に、改めてここで編集者として礼を申し述べたいところである。

事実、本紀要別冊1の『二葉亭四迷資料』の組版のごとき、編集・植字のタイアップあってこその成果だったといえようか。

大野館長の本紀要への力のいれ方はたいへんなもので、ご在職中の第5号まで、各号に巻頭言を記され、そして各号の表紙にはご自身撮影の館風景の写真を載せられたのだった。

この館風景写真は、その後も当館紀要の表紙の優美な装いとして21号まで、館員たちの写真により、続いていったのであるが、その創刊号の時は、どういうスタイルの題字を、蔦葉の万葉に包まれた窓の写真に排すればよいのか、と悩んだ。結局、川上一氏の優麗な筆を選び、裏表紙の蔦の太根と共に、非常なユニーク性を発揮する美麗な表紙となしえたつもりであった。背文字を写植体にしたことも、大扉を正楷書体にしたことも、一応は効果的であった。

本誌が、その第3号を出したところで、図らずも、その編集発行において、「私立大学図書館協会賞」を受賞したことは、編集者としては、多少、心の安まるものであった。

図書目録は、活版、ワープロ両時代中間の和欧タイプ平版印刷が主流的だった。タイピストのご苦労には、いまも感謝が尽きない。

当館紀要もめでたく第30号に達し、幾多先人たちと共に歩んだ旧館百年の巨歩を追懐して、その大功績を偲び、かつ謝しながら、新館生々の誕生を慶祝する、格好の場としての役割りを果たそうとしている姿に、旧編集者は無上の安堵と喜びに浸っているしだいである。

（もぎ　ぎょうしゅう　在職昭三三～五三）

部局出向の頃のこと

植田　覺

昭和三十六年四月、当時の館長大野實雄先生のご指示により部局出向制度が発足した。これは今から思えば大変なご英断であって、早稲田大学全体の図書行政に於て劃期的なことであり、現在でもその成果が十分に生かされており、特に文献探索に学内はもとより、学外からの問合せに日夜部局の図書カードが繰られているのである。

始めは、法・商・文・理・教の五学部に一人づつ計五人の館員が派遣されただけだったが、今日では、八学部のみならず、両学院や研究所五ヶ所の計十五ヶ所に四十六名もの館員が活躍し、また一昨年には所沢図書館も開館して館員四名が働いている様を見ると、まさに隔世の感がある。現在では多くの館員が学部出向の経験を持ち、その異質な経験が図書館活動を豊かにしているわけである。

第一回の学部出向では北川・馬場(宏)・山本(信)・佐藤(光)の諸氏とは違って、私の場合は他の大学図書館から転職した時だったので、嫌も応もなかった。かねてから早稲田大学図書館の令名はとどろいており、その中で働ける希望にあふれて上京したのだったが、いきなり文学部へ出向を云い渡され、いささかとまどいを感じた。まだ早稲田大学の図書館を全く知らないうちに学部へ行ってうまく行くだろうか、果して学部は我々を受入れてくれるだろうか、どんな風に迎えてくれるだろうかと危惧の念を禁じ得なかった。その折他の諸氏が話題としたのは「一体我々は栄転だろうか、左遷だろうか」ということだったのを今だにはっきり覚えている。

とにかく大野館長から、「学部へ出向して、その学部で購入する図書のカードを作ってもらいたい。それを図書館へ送ってもらい、学部での図書情報を得ることにする」と申し渡され、「間違っても受入業務だとか、『特研図書（現在の個人研究費図書）』などには手を出さないでもらいたい」と念を押された。任期は二年ということになった。

私の配属されたのは文学部で、当時は現在の法学部事務所のあるところであった。さて学部へ行ったもののすわる場所がない。事務所の人に私がこの学部に来た由来を話して理解しても

らう積りだったが、仲々こちらの真意がわかってもらえず、始めは事務の手伝いがふえたぐらいにとられたものの、やがてそうではなく、図書の仕事をするとかいう、事務所の人とは別の範疇の者だとわかって、今度はそれまでとは違って、私に対する扱いが冷たくなった。こうした事情は文学部ばかりでなく、大なり小なり他の学部でも同様だったようである。

とにかく事務所の人の計らいで、ないスペースを無理に都合してもらって狭い場所をあてがわれ、それに見合った小さな机をもらって仕事を始めることになった。

だが仕事以前のことが先ずもちあがる。私の席はもともと通路のようなところであったので、事務所の人が通る度に席を立って道を譲らねばならない。これが一日に十回以上ある。だがこれはまだいい。始めは、「私は図書の仕事をしに来たので、事務の仕事をしにきたのではない」という気持でいたものの、事務所の人が席を離れて、学生が窓口に殺到しては、事務の仕事はわからないながらも、応対せざるを得ない。何しろ私の席は窓口に近いのだから。それ迄八年間他大学に勤務していたものの、こうした経験は始めてで、要領を得ないまま、学生におこられたりして、思わぬ経験をした。しかし、事務所の業務に少しづつ協力する様になってからは、事務所の人たちの対応も大分好転する様になったと思えた。特に入試の時期には、事務長から猫の手も借りたい位忙しいのだから図書の仕事どころではないといわれ、図書の仕事に対する評価にくやしい思いをしたが、これも仕事の円滑のために致し方ない処置だと観念して、入試業務を願書受付から合格発表まで三ヶ月間行ったことも思い出される。勿論その間図書の仕事は完全にストップであった。

図書カード作成の方は、部局の図書はＮＤＣで分類し、ＮＣＲで目録をとる様指示されたが、私の場合は過去八年間の実績があったので、殆ど問題なく進めることができた。ただ当初は事務所の人が一人図書係としており、その人が会計、押印、分類、装備、教員との応対を行っていたが、分類といっても独特の番号で区分するだけで、ＮＤＣではないので、その仕事のうち私にとって重要な業務を渡してもらう様辛抱強く交渉するのに骨が折れた。

こうして半年毎に一回、作ったカードが図書館の図書月報に載るところまで行き、とにかく館長の要請に応ずることができた。だが何もかも新しい試みだったため、整備すべきことは山

ほどあり、とても二年ではそうした問題を解決できそうになく、又解決も中途半端になり、意に充たなかったが、館長からの命令で二年後に本館に戻った。

その内図書予算の飛躍的な増加にともなって仕事量も増加の一途をたどり、カード作成以外の図書の仕事もふえ、事務所との関係でも多くの問題があったが、それからも少しづつ改善され、現在の姿に発展してゆくことができた。

やがて創立八十五周年の整備計画で、文学部・理工学部キャンパスの移転を皮切りに、法商研究棟や教育学部の新築など大学の発展が続いた。文学部では、私の出向した翌年の昭和三十七年に現在のキャンパスに引越し、図書室として事務所とは離れた独立した大きなスペースを与えられ、大いに意を強くしたが、大学院の図書担当の出向者も加わって、あっという間に狭くなり、次々に増築や移転をくりかえし現在の図書室となった。私自身は出向から本館に戻って（というより始めて本館に勤務したわけだが）二年後に、同じ場所ながら大学院の出向者として五年間勤務したので合計七年間文学部にいたことになる。その頃の数々の思い出がいまでも瞼に残っている。当時親しくしていただいた文学部の事務所の方で鬼籍に入られた方もおり、多くの方がすでに大学を離れておられるのを思い、今昔の感にたえない。

ひるがえって当時の図書館界の動向を見てみると、二つの課題があった様に思う。いずれもアメリカの大学図書館の影響である。一つは、いわばアンダー・グラデュエイト・ライブラリーの創設である。早稲田大学図書館とハワイの東西文化センター図書館との提携により、一九七〇年に半年間出張研修で派遣された折、ハワイ及び米本土の大学図書館をいくつか見学することが出来、その実状を目の当たりにすることができた。特に学部学生用のアンダー・グラデュエイト・ライブラリーはどの大学にもあり、充実していたが、日本では新制大学のカリキュラムにのっとり、教科書中心主義を否定して、アサインメントによる予習重視の方式をとったが、早稲田大学で作られた学習図書室では当初は教科書中心の傾向が強かった様に記憶している。

又もう一つの課題はレファレンス・サービスの充実であり、アメリカでは主な参考文献が利用者の一番目につくところに集めて並べられており、そのオープンぶりには目をみはったものだった。日本でも研究文献の流通をオープンにして、そこに有能な参考係が介在して徹底したサービスを行うということを目

標にしたわけだが、実際は「学術雑誌総合目録」を利用して、他館利用の紹介状濫発に終始したことは否めない。参考図書のスペースが小さすぎることはその当時から云われていたことである。

最後に、学部出向の頃のことで今でも強く心に残っているのは、大野館長が常々いわれていたことで、図書購入或は利用の効率化の問題である。先生の言によると、例えば「和辻哲郎全集」は各学部や学生読書室で購入している様なので、大学全体としては相当部数存在するが、果してこの様な書物が学内全学部で必要かどうか疑問に感ずる。この本の場合は、明らかに必要な部所を限定するとか、或はその部数を減らして然るべきである。そしてその浮いた費用をもっと有効に使うことができる筈だと。事は「和辻」に限らないので、洗い直しをすれば大学全体では相当の効率化を計ることができるのは当然である。この先生のご要請を私はいつも心に留めて、先年受入係在籍の時には、何よりも無用な重複を避けることに全力を尽した。聞くところによれば、慶応義塾三田情報センターでは、この趣旨の制度があって多くの実をあげているといわれる。私もこの様な制度が何とかして早稲田に根づき、大野先生の播いた種が成長して花を咲かせることが出来るのを心から願っている。（この小文執筆に当り北川幹造氏のご教示を得たことを付記しておく）

（うえだ　さとる　洋書係調査役）

はじまりは「指定図書室」から

赤座　典子

学習図書室は昭和三十七年十一月一日「指定図書室」という名称で開設されました。

授業の助けとなる、むずかしくない図書を、利用者が直接書架から選べる図書室が始めて出来たのです。アメリカでは授業の為に読まなくてはいけない図書を〝リザーブド・ブックス〟として扱っていました。日本でもそのような制度が認識され始め、時代の要求によってこのような図書室が生れたのでした。

準備を始めたのは昭和三十七年四月、場所は当時の副館長室（現在の新館準備室）、企画担当の洞副館長と作業担当の入職二年目の私との二人で始まりました。

図書の選択については「図書館紀要」4号に「創立八十周年

記念座談会」に於て、大野館長が述べられていますが、「教員の方々のアンケートからの回答及び学部要項による参考書・教科書を全部あつめた……」とあります。その辺はあまり詳しく覚えていませんが、当時は本館用の見計い図書の書架が副館長室にあり、その中から、指定図書室用の図書も、大野館長や洞副館長が選書をされました。

夏休み期間中、閲覧係ではカウンターに出された請求票の中から、利用の多い図書を選び出して、指定図書室の購入用にしました。現在とは形式の違った2冊連記の請求票を二つに切り離す事から始める作業は暑さの中、大変でした。又、新刊ではない基本図書は直接神田の古書店へ出かけて選びました。購入済みの分は覚えきれないので、特に冊数の多い歴史の分野のカードだけは束で持って行き、洞先生の選ばれるのと比べながらお伴をしていたのを覚えています。

購入後の図書については、分類はNDC7版130項目（政治・経済・法津のみ項まで、他は類のみ）とし、目録の書名カード1枚のみを作成、洋書は図書記号に「E」をつけるという形式で整理しました。この発注から装備までの全作業を6月から増員された一名と計二人だけで片付けていきました。

図書館の人と仕事

十一月一日、四千二百冊の図書と共に指定図書室は開室しました。場所は第三閲覧室の奥の書庫でした。従来の書庫をしきって入口をつけ、係員が2名つける机が置かれました。入口には次の様な利用案内が貼られ、外側の壁、即ち第三閲覧室の中にロッカーが置かれました。

指定図書室入室順序

一、受付に学生証をお渡し下さい。引換えにロッカーの鍵をお渡し致します。荷物（かばん・コート類）のある方はロッカーに納めて入室して下さい。ない方もそのまま鍵をもって御入室下さい。

二、読みたい本があったら（二冊まで）所定の用紙に必要事項を記入し、鍵を添えて受付に差出して下さい。荷物のある方はその時ロッカーから出していただきます。

三、お借りになった本は閲覧室でお読み下さい。

四、お読みになったら指定図書室返却係に御返却下さい。学生証をお返えし致します。

㊟1、入室者数には制限があります。あとの人のために長い立読みは御遠慮下さい。

利用者は貸出手続きをとって、隣りの第三閲覧室で図書を読んだ訳です。図書室そのものは、書庫の中を区切った場所なので天井も低く、一日中電気をつけていなければならない、時間の感覚が全然ない所でした。

開室時間は午前九時から午後九時まで。貸出冊数は二部二冊まで。開室後、指定図書室の人々は、希望図書申請の受付け、閲覧カード用の手書き複製、図書室の利用をよびかけるビラの作成配布、利用の多い図書の副本化等、よりよい利用を目指して、少ない人数で「大奮闘」しました。利用者は法学部の学部生が多かったと、当時の担当の方から聞いています。大野館長が法学部の教授で、直接選書をなさっていた事が大いに影響していたと思われます。

業務日誌によると、開室初日の利用者は六十一名ですが、年度の終りの統計では一日平均が一七三名、蔵書数も三千二百冊増加した次の年度では二四三名となっています。昭和四十五年四月十三日、当時の19号館（現7号館）2階への移転を機に、「学習図書室」となり、現在に至っております。

（あかざ　ふみこ　政治経済学部教員図書室）

受入係今昔

鎌倉　喜久恵

今、図書館に「受入係」という係はない。図書館の歴史の中に永く名をとどめていた係なので、その係が何をしていたのか、何時、何故その名が消えたのかを記録しておく、いまが一つの機会ではないかと思って、受入係に在籍した二十年間をふり返り乍ら記してみたい。

私が受入係に配属されたのは昭和三十六年、同じ時に青木枝朗さん、赤座典子さん等が受入係になっている。そしてこの年、受入係の態勢が大きく改められた。

それまで、図書は、まず書店から受入係に運び込まれ、納品書と照合のうえ、和・洋書係に廻付される。和・洋書係では各々、調査・選択のうえ、購入分を決定して、受入係に差し戻す。受入係では返品は書店へ、購入分は請求書を提出させたうえ、登録簿に記入し、登録番号を附し、スリップを作成して、再び両係へ戻す、という購入手続きをふんでいた。予算につい

ても、実質は両係が運用、受入係は予算の差引きと請求書の処理だけを行うということであった。

この方式を他大学の受入方法と比較して、「無駄な作業が多すぎる」という一文を雑誌に発表した館員があり、それを読まれた大野館長が早速その是正を考えられた。そして、受入係で、予算の施行と、図書の納品から選書までの作業を行い、購入決定されたものを、和・洋書係に渡すということに改められた。図書が右往左往しなくてすむ、というわけである。

しかし、従来の態勢のままでは、まず選書というところで問題がおきてしまう。それを解決したのが「副館長」の制度だった。大野先生はご就任の時に「私は図書館については素人だし、法律以外のことは良くわからないから」とおっしゃって、阿部敬二先生と洞富雄先生を副館長に据えられた。お二人共、その前は永く和・洋書係の主任をつとめられ、学内で、管理職でないのに、管理職と同じ様に手当のついた、たった二人の職員、という権威のある主任であった。このお二人が、そして三十七年に阿部先生が亡くなられてからは、加藤諄先生が副館長になられ、大野館長と三人で選書にあたられた。今、野口副館長が蔵書構成をみておられるのと同じ態勢であったわけである。三館長の指導はきびしく、係員が選書準備を整えた棚の前に立って、一冊々々を手にとられる後姿を、いつ、何を聞かれるかと緊張してみつめていたものである。しかし、本を手にとられながら、それに因んだいろいろの話をして下さり、話の中から次々に揃えるべき資料の名があげられてゆくのは何よりの勉強で、あんなに有難かったことはない、と今も思う。古書店の目録にも、自分で必要と思うものに印をつけてから持って来るようにと言われ、何故印をつけたか、これを買うというからには、なになには揃っているのだな？　などと聞かれ乍ら、大方は叱られるのだけれど、時にはほめても頂いたりして、まるで試験を受けているような一日一日だった。しかし、あの緊張の五年間が、あとの十五年を何とか支えてくれたように思われる。

佐々木八郎先生が館長になられてから、副館長がおかれなくなり、受入係も急に一人でほうり出された感じで、これはどうなるのかと思っているうちに、今度は館長参与、選書相談役の先生をお願いするようになり、中野幸一、加藤諄、小林正之、小松芳喬、辻村敏樹等の諸先生がおいで下さるようになった。しかし、副館長と違って毎日ではないので、日常の仕事では困難が生じ、和書について言えば、青木さんはもとより服部さ

ん、中沢さん、山本さん、柴田さんと、誰といわず聞き廻るという形になっていった。今のような莫大な予算ではなく、洋書では、継続ものを買ってしまうと、残金はない、という位で、少し位の残りなら足りない和書予算の方に廻した方が効果的だと言われる位であったから、何とかやってゆけたのだと思う。青木さんは、本屋さんが来ると「隠れたい」と言う位の予算の無さだった。漸く予算が増え始めたのは、昭和五十年、受入係主任が青木さんから植田覚さんに交替した頃だったろうか。

昭和五十七年、濱田泰三館長が就任されてから、図書館新館建設にむけての新構想が示され、事務組織も改変されてその手はじめに受入係が廃止された。

現在、受入の仕事は、和・洋・逐刊その他各係に縦割りに配分されて、選書から目録を作り、装備されて、閲覧係の手に託されるまで、整理課で一貫して処理されている。新館落成時までには更に新しい方法がとられるとも聞いているが、コンピュータ化に目をみはり、カードレス時代にどぎまぎし、最後に新図書館の偉容に驚嘆する、老耄しているヒマのない、幸せな時に在職したことを感謝している。

（かまくら　きくえ　特別資料室）

昭和四十年代の和漢書係では

馬場　静子

図書館に就職して四年目の昭和四十年から昭和五十四年までの十四年間、和漢書係で主として目録・分類の仕事をしていたので、その間の業務についていくつか述べたいと思う。当時はまだ課長制がとられていなく、現在の整理一課（和漢書係）の仕事のうち、図書の発注、受入、寄贈・交換業務は受入係が行い、目録、分類等の整理業務は和漢書係が行っていた。また、目録編成係という係があって、カードの複製、閲覧者用カード目録のファイル等の仕事を行っていた。この目録編成係は昭和三十六年に設置されたのであるが、それまで和漢書係が手書きで閲覧者用のカードを複製し、ファイルも行っていたのを、複写機を使って閲覧者用カード、冊子体目録の原稿にするカード等数枚を複製する方法をとるようになり、新しく係を設けたとのことである。それに伴ってファイルの仕事も目録編成係で行うようになった。その後、カード印刷の方法の変更や、目録・

分類の担当者がファイルも行った方が日常的にいろいろ問題点も把握でき、業務に活かせるのではないかといったこと等の理由から、目録編成係は昭和五十一年に廃止された。それ以降は和漢書係でマスターペーパーに直かに手書きで目録をとり、カードを複製し、ファイルも行うようになった。この方法は昭和六十年に機械入力が開始されるまで続いた。

端末を使って書誌を入力し、オンラインで利用者に提供できるようになったいま、手作業で行っていた頃の仕事のどれをも漏れ落さないように細心の注意を払う必要があろう。手作業時代の、目録をとり分類をつける整理業務は、利用に供するための閲覧者用カード目録にファイルすることで、はじめてすべての業務が完了したといえる。従って、ファイリングの際に気づく数々の訂正は大変重要な仕事となっていたのであるが、同様にオンライン入力時代に入ってからは、データの修正、典拠ファイルのメンテナンスといった仕事が極めて重要になってくることは云うまでもない。これらの仕事が十分行えるような体制をしっかりつくっておく必要があろう。

昭和四十年代までの目録カードの一例を図1に示すが、この記述方法は、『早稲田学報　第四十六号(明治三十三年十一月五日発行)』の「早稲田記事」に〝本校図書館拡張〟として、「浮田和民氏に館長嘱託以来同氏は孜々とし改良拡張に力を注ぎ図書目録をカード仕組に改め種目の分類を明かにし索引上大に便ならしめ其他種々改革せられつつあるが」と記され、また、

仁　ヨ 3 123	国家社会制 英・ドーソン撰　光吉元次郎訳 明治廿五年六月三日 洋菊

ト 2 2672	比較教育学 F．シュナイダー撰・沖原豊訳 一九六五年六月 洋中

図 1

『早稲田大学図書館紀要（明治四十年十月）』に、「翌三十六年に至り、開館以来着手中なりし「カード」目録漸く整頓を告げ、又始めて二種の印刷目録を出版したり」と記されているところから、明治三十三年から三十六年の間をその起源と推測できる。その後ずっと、基本的にはこの記述方法で目録がとられてきた。

当時は成文化された目録規則がなかったので、先輩からの口伝を中心として、さらに疑問が生じると事務用カードをみて、また、階段を駆け上って行っては書名カード・分類カードを一枚一枚繰って参考となる事例を見つけ出し、多少の不安を残しつつ仕事に当ったものである。

昭和四十二年六月に課長制がしかれ、閲覧課長に就任した田口親さんが、和漢書係を去る直前の五月に〝置土産〟だといって、『早稲田大学図書館和漢整理事務必携（案）』を残していかれた。以降、この「必携」をもとにして、統一した目録がとれるよう係内で話し合いを重ねていった。

「戦前青年図書館員連盟の手により刊行された日本目録規則（NCR）を、戦後の新しい図書館に即応改訂して」（『日本目録規則　一九六五年版』まえがき）、日本図書館協会が『日本目録規則　一九五二年版』を刊行し、次いで『同　一九六五年版』を同年五月に刊行した。このNCRは、当時わが国の標準目録規則としてその役割を果しつつあった。

昭和三十六年に部局出向制度が発足し、図書館から五学部へ司書が派遣されたその折、当時の大野實雄図書館長は、部局ではNDC六版で分類し、NCRで目録をとるよう指示された。NCRに比較して従来からの図書館の目録記述方法は、出版事項、対照事項、注記事項等について殊に記述が省略されており、利用上不便をきたしていたので、本館でもNCRに準拠した目録規則にしてはどうだろう、といった意見が出はじめていた。ただし、NCRの著者基本記入方式は採用せず、昭和五十二年の『日本目録規則　新版　予備版』の「記述ユニット・カード方式」を先行したような型のものを考えていた。係内で実例に則しつつ、事項ごとに検討を加え、漸く、昭和四十七年七月に、『早稲田大学図書館和漢書目録規則（新規決定分）』を和漢書係でまとめ、館内に配布した。（図2のカード例を参照されたい。）

閉架式の書庫であるため、入庫できない利用者は、資料を借り出す手段として、カード目録か、冊子体目録を利用すること

「オウサカ」とファイルした。分類目録も本の数が多くなるに従って、細分化を要する綱目が数々でてきていた。しかし、館内の合意と作業量の面から、利用者の不便を気にしつつもなかなか実行に移せなかった。それでも地方史がすべてリ5・地方史のもとに書名の五十音順でファイルされていたのを県別に組みかえたり、ヌ6・日本人個人伝記をやはり書名でファイルしてあったものを被伝者順に直したりと、特に目立ったところだけは徐々にではあるが手直しして利用に供した。昭和六十年以降の機械入力した図書については一冊の図書を検索するのに、書名・著者名・分類(NDC)・件名等いくつかのアクセスポイントを利用できるということは、あの頃整理に苦労したものにとっては、大きな悦びを感じるものである。それ以前の図書については、現在和書データ・ベース化事業室において遡及の作業が進められており、近い将来には全資料が多岐検索できることになる。

分類の変遷については、以下に挙げる資料から知ることができる。

一、『明治二十七年十二月十日現在　東京専門学校図書室　同攻会図書館　図書総目録』(『中央時論』第九号別冊附録(明

ヨ2
5912

国家独占資本主義論

大間知啓輔著
京都　ミネルヴァ書房　1981. 3
265p　19cm (社会科学選書62)

コッカドクセンシホンシュギロン

図2

になるが、和漢書の場合、カード目録は書名と分類(冊子体目録収録以外のもの)だけで、著者名はなかった。長い歴史を背負っている図書館故、時代に即応した措置がなかなかとりにくく書名目録のファイリングにも多々問題をかかえて業務を行わざるを得なかった。例えば「大阪」は「オオサカ」ではなく

表 1

専門学校		同攻会	
部門	分類	部門	分類
第壱類 伊	歴史及伝記	第一類 天	歴史及伝記
二 呂	地理及紀行附地図	二 地	地理及紀行附地図
三 波	経書子類	三 玄	経書子類
四 仁	哲学及宗教	四 黄	哲学及宗教
五 保	法律	五 宇	法律
六 邊	政治	六 宙	政治
七 登	経済附産業	七 荒	経済
八 知	統計及年表	八 洪	統計及年表
九 利	教育文学及語学	九 日	教育文学及語学
十 奴	数学	十 月	数学
十一 留	博物学	十一 盈	博物
十二 於	小説	十二 晨	小説
十三 和	雑書	十三 辰	雑書
十四 加	字書	十四 宿	字書
十五	新聞	十五 張	新聞及雑誌
十六 與	雑誌		

同攻会図書は，専門学校図書室に寄託されていたので，各々別の分類記号を付している。

表 2

第一類 伊 歴史、伝記
第二類 呂 地理、紀行
第三類 波 宗 教
第四類 仁 哲学、倫理、経学
第五類 保 法 律
第六類 邊 政 治
第七類 登 経済、財政
第八類 知 統計、報告、要覧
第九類 利 国 文 学
第十類 奴 理 学
第十一類 留 教育、心理
第十二類 遠 小説、戯曲
第十三類 和 支那文学
第十四類 加 字書及目録
第十五類 與 外国文学
第十六類 多 美術、工芸
第十七類 連 産 業
第十八類 曾 随筆、叢書
第十九類 津 雑 部

治十七年十二月刊)』(表1参照)

二、『早稲田大学附属図書館蔵書目録 和漢之部 明治三十五年十二月現在(明治三十六年七月印行)』(表2参照)

三、明治三十六年一月から大正三年六月までの間、印刷分類目録調整後に増加した和漢書を謄写版を用いて三次にわたって調整した『和漢書分類追加目録』

四、現行和漢書分類表（大正十三年四月改定）

（『早稲田大学図書館一覧（昭和五年五月刊）』一八頁挿入）（表3参照）

五、現行和漢書分類表（大正十三年四月改定）

（『早稲田大学図書館一覧（昭和九年九月刊）』一九頁挿入）（注・「四」の表とほぼ同一であるが、綱、目に多少の改定がみられる）

六、早稲田大学図書館和漢書分類表（大正十三年四月改定　昭和三十年三月改訂）（『早稲田大学図書館一覧（昭和三十年刊）』二十二頁挿入）（表4参照）

七、『和漢書分類表一九八四（昭和五十八年六月改訂）』

分類については、いくつか記しておきたいことがあるが、「ヨ3　社会主義」についてのみ述べておこう。「経済」の分類を表5に示すが、ヨ3に「社会主義」の綱がある。ここには経済に関するものだけでなく、件名的

表3

イ	総類
ロ	哲学
ハ	宗教
ニ	理学
ホ	語学附修辞学、演説法
ヘ	文学
ト	教育
チ	芸術
リ	歴史
ヌ	伝記
ル	地理
ヲ	社会附風俗、家庭、娯楽、運動
ワ	法律
カ	政治
ヨ	経済
タ	財政
ツ	交通
ネ	商業
ナ	農林附水産
ム	工学、工業
ヤ	医学
ケ	兵事
ヒ	統計

表4

イ	総類
ロ	哲学
ハ	宗教
ニ	理学
ホ	語学
ヘ	文学
ト	教育
チ	芸術
リ	歴史
ヌ	伝記
ル	地理
ヲ	社会
ワ	法律
カ	政治
ヨ	経済
タ	財政
ツ	交通
ネ	商業
ナ	農林附水産
ム	工学・工業
ヤ	医学
ケ	軍事
ヒ	統計
モ	ゴルドン文庫
九	寧斎文庫
イ二	下村文庫
イ三	花房文庫
イ四	大隈文書

一般形式細目

総記
論文
史伝
事情
書目類
事彙・辞書
叢書
全集・選集
（主題細目の位置）
雑書
雑誌

な解釈をしていたのであろうか、政治、政党、社会思想、社会運動等々、多種のジャンルのものが分類されていた。この「ヨ3社会主義」は大正十三年四月改定の分類表上に現われるのであるが、それ以前は「仁哲学及宗教」、「辺　政治」、「登　経済」等に分類されていたものをここにまとめて分類している。大正十三年は、日本の社会主義、労働運動が高揚し、前年には共産党の第一次検挙があり、禁止図書についての通知があったりの時代である。分類表上に「社会主義」の綱が設けられるのも理解できる。しかし、戦後二十年以上経ての昭和四十年頃に件名的にこの綱を使用することは限界にきていた。館内にも批判の意見はあったが、「ヨ3」は昭和四十四年で凍結させることとなった。洋書分類表にも「EC　Socialism」があるが、洋書の場合、目録は著者名と件名で、分類目録はなく、「EC」を書架分類としてのみ用いていたので、和漢書とは別の見方ができたのであろう。

（ばば　しづこ　総務課長）

表 5

ヨ　経済

一　総記・雑書
　総記
　論文
　経済事情
　書目類
　事彙・辞書
　叢書
　全集・選集
　雑書
　雑誌
二　経済学及学史
三　社会主義
四　経済史
五　経済史料
六　経済政策
七　農業経済附農業史
八　工業経済附工業史
九　労働問題・社会政策
　総記
　労働事情
　労働法制
　賃金問題
　労働聯合・労働運動
　社会保険・災害賠償
　失業問題・職業紹介
　労働衛生
　労働能率
　福利増進
　労働教育
　国際労働会議
　雑書
　雑誌
一〇　経営学・企業
　総記
　企業集中
　会社
　同業組合
　商工会議所
　経営者団体
　公企業
　雑書
　雑誌
一一　協同組合
一二　拓殖移民

法律目録の編纂について

山本信男

一九七二年の五月、ハドソン河に面したニューヨークのアパートに居を定めてから間もなくの日であった。アパートのメールボックスに大きな郵便小包が日本から届いていた。急いで開けてみると、中味は「早稲田大学図書館和漢図書分類目録　法律の部・2」であった。ずっしりと重い目録を手にしながら、数年に及んだ仕事のあれこれや仲間達のことを思い出していた。まったく偶然の切っ掛けから、ニューヨーク市にあるコロンビア大学図書館のプロフェッショナル・ライブラリアンとして雇われて、期待と不安の入り交った複雑な気持を抱いて赴任した直後であっただけに、特に印象が強く、今でも当時のことを鮮明に思い出す。

異国の地で出来上ったばかりの印刷目録を受け取ったときのことをはっきりと覚えているのに比べて、法律の印目を作り始めた頃のことは残念ながらよく覚えていない。しかし、大野元館長が全学図書行政整備の目玉として採用された部局出向制度の一期生として送り出された法学部から、二年の任期を終えて本館へ戻って間もなくのことであったように思う。因みに、図書館の重要な仕事の一つとして、図書館が過去に集積した図書資料の書誌データを冊子の形にまとめる印刷目録の作成がある。この仕事は、利用者の便宜を図るためであることはもちろんであるが、同時に図書館の仕事を社会に広報し蔵書構築を見直し資料収集の新たな出発点とするという大切な目的を持っている。図書館の基本的なこの仕事が、戦後二十数年間行なわれていなかったという。戦前には、総類、文学をはじめとする十五部門の冊子目録が刊行され、世間からも高い評価を得ていることは周知の通りである。この冊子目録の刊行を再開したいという図書館の強い要望と諸般の事情によって、「法律の部」の刊行に白羽の矢がたったようである。

編集スタッフとして、中村義人氏、深井人詩氏と私、印刷・製作の責任者として茂木堯秀氏が任命された。当時図書館では、「紀要」をはじめ各種の印刷物を製作・刊行し、図書館が広報活動に力を入れはじめた時期であるが、印刷・出版のプロである茂木堯秀氏がいたからこそ、各種の出版物を製作・刊行で

きたし、大事業である法律の印目を出そうという企画が成り立ち得たように思う。当時の大野館長の強い意志と茂木さんの存在があったからこそ、この事業がスタートできたのであろう。編集スタッフの一人として任命された私の仕事は、何を法律の印刷目録に収録すべきかを決定することであった。早稲田大学図書館は、独自の分類表として「イ、ロ、ハ……」の文字と数字を組み合せたものを使っており、法律は「ワ」に一応分類されている。しかし「ワ」以外にも、それぞれの主題に関係する規則および解説書は、それぞれの主題の下に分類されており、また、長い間には分類基準も揺れ動いている。したがって、「ワ」に分類されているものだけを集めても、法律の印刷目録にはならないことは初めから明らかであった。法律の印刷目録としては、大正十四年に「法律之部」が刊行されており、この印目は、明治十五年から大正十三年の間に、早稲田大学図書館が収集した法律関係の図書資料（雑誌類は除く）を収録している。これに引続いて、今回の印刷目録は、大正十三年四月から昭和四十四年三月までの間に収集した法律関係の図書資料を対象としている。すなわち、四十五年間にわたって集められた日本語、中国語、および、韓国語で書かれた法律図書を、すべて洗い出す必要があった。洗い出し作業を行う基本的なトゥールとして、図書館の基本台帳である図書原簿を使い、「〜らしきもの」を含めて抽出する作業を開始した。すなわち、「ワ」以外のすべての図書原簿のうち、大正十三年四月以降の部分を一点一点チェックしていったわけである。正確な数は分らないが、早稲田大学図書館が所蔵している和漢書の約三分の二にあたる数十万点をチェックしたことになるだろう。図書原簿をもとに、「ワ」以外のすべての分類項目に記帳されている一点一点をチェックし、法律に関係がありそうな資料を選び出した。次に、選び出した資料の請求記号を頼りに、一点づつ原物に当りながら確認していった。そして、法律関係の資料と判断したものについて、中村義人氏をはじめとする他のスタッフの手で、一点づつ書誌事項を点検し、加筆訂正していった。このようにして出来上ったカード目録を、特に印目のために作成した分類表に従って分類し、一つの体系として編成した。その後は、印刷担当の茂木さんを中心に、カードを基にして作った原稿を切り貼りしながら印目原稿を作成した。この切り貼り法というノリとハサミを使った独特の原稿作りは、確か茂木さんの考案だったと思う。その他、書誌データの整備および根気のいる索引作り

は、中村義人さんや深井人詩さんの精力的な作業のお陰である。

いずれにしても、図書館員として数年の経験しかなかった若輩に、戦後第一号の印刷目録の作成をまかせて下さった大野元館長をはじめとする当時の執行部の人達の英断に頭が下がる思いがする。第二次学費値上げ騒動という早稲田の歴史に永久に残るであろう事件のあった時代を含めて、数年に亘る難事業ではあったが、全力投球ができた仕事の一つであると今でも自負している。現在は、明治期資料のマイクロ化という気の遠くなるような仕事にとりかかっているが、法律の印刷目録作成の仕事を始めた当時と同じように、現在図書原簿の頁をくる作業から始めている。「歴史は繰り返す」とは、このことであろうか。

（やまもと　のぶお　明治期資料マイクロ化事業室調査役）

参考係のこと

渡部　輝子

私が参考係に勤務したのは昭和三十九年四月から五十四年六月までの十五年間であった。が実はそれ以前にも「参考図書室」と呼ばれる、今の第二閲覧室に百科事典・辞書類等のいわゆる参考図書を集めた部屋に閲覧係の一員として一年ばかり勤務したことがある。

今でこそ「参考係」が図書館に置かれるのは当然のことであり、図書館の主要業務として誰でも知っている。然し、整理部門尊重の気風が色濃く遺っていた昭和三十年代では、まだまだ影の薄い存在であり、いったいどんな仕事をするのか、専門家（学者）相手に何が出来るのか疑問視されており、係員自身にも業務についての明確な意識は確立されておらず、暗中模索、試行錯誤の時代であった。また独立した係を持つ処は少なく、閲覧係の一部として兼務している図書館の方が多かった。そんな中で昭和三十年、参考図書室（前述）と読書相談室（現在のコピー室にあり、書誌・書目類を集め、資料の利用案内や早大関係者の著作目録、クリッピング等の自家資料の作成等々を行っていた）の二室を擁する係として独立し、一時は総数十人前後の係員がいるまでになっていた。

ところが昭和三十六年、学部出向制がしかれた際大幅に縮少され、読書相談室は二人となり、参考図書室は閲覧係の一部として運営されるようになったのである。当時の大学図書館にお

ける参考係の位置、認識の程度が窺われるように思う。然し、翌三十七年再び改められ、念願であった参考図書室と読書相談室が名実共に合併し、今の場所に移り、総勢六人（昼勤四・夜勤二人）の参考係として再発足、現在の基礎がつくられた。主任は故中沢保氏であった。一度は揺らいだが、参考係への確かな認識があったと云えよう。

昭和三十九年四月からここに勤務したが、当時はまだ参考業務が利用者への援助業務として組織的に行われるより個人的援助として行われる面が強かった。カウンターは今と反対側にあり、参考図書の受付けと相談係と二つに分かれていた。主任が一番奥にいて、質問が難しくなるに従って奥へ進む、と云う仕組みになっていた。利用者もあまり多いとは云えず、殊に教員は個人的な相談でみえる少数の方に限られていた。一般によろず承り所的性格があり、特別図書の閲覧、複写受付け、マイクロ資料やソノシートの利用等、図書館の中でまだ扱い方の決まらないものを参考係が引受けていた。これは組織が整っていくに従って整理されていった。私は簡単な所蔵質問にも右往左往しながら少しづつ資料やトゥールについて覚えてゆく一方、毎日の新聞に目を通し、時事問題や新刊書・雑誌の広告等の切抜きをしていた。当時、雑誌記事索引や書誌・書目の類は極く限られたものしかなく、特に新しい問題については新聞の切抜きに頼るしかなかった。この作業は内容的に変化しながら長く続いたが、余所目には極めて優雅に見えたようである。

昭和四十二年、北川幹造氏が主任になる頃から大きく変り、二分されていた受付けが一つとなり、サービスに対する姿勢も積極的になっていった。そして昭和五十一年、深井人詩氏の主任の時代にカウンターを入口近くの現在の位置に移し、事務の場も設け（それまではなかった）、現在の形が出来上った。

利用者が求める資料を提供する係としての意識が高まって来るにつれ、文献複写をはじめとする図書館間の相互協力が生れ、四十年半ばには利用者からの希望もあってレーニン図書館との相互貸借、アメリカ・フランス・ドイツの主要図書館間との複写協力も行うようになった。また部局図書室所蔵資料を参考係が窓口となり、責任を持つことによって利用出来るようにしたが、当初は電話一本でとはいかず、出かけて行って拝借していた。初めは何事も頭より手と足を使うことの方が多かった。すべての面で実績を作ってゆくことによって徐々に業務として定着させ、組織化されていったと云える。

レファレンス分科会に出席することも仕事の一つだった。お互いの質問例を持ち寄り、解答法を討議し、トゥールについて知識を交換し、質問者との応答の仕方を考え、参考業務とは何かを話し合ったりした。暗中模索の中にあった参考業務と係員の拠り処となり、ここで知り合った人達を窓口として相互協力を始め、やがて組織的なものへと発展させていったことを思うと、レファレンス分科会の果した役割は大きかったと思う。

利用者から毎日課題を提出され、勉強する日々であったが、利用者が求める資料を出来るだけ早く、適確に提供することが職務である以上自館の資料はもとより、何処にどんな類の資料があるか、どんな書誌・書目があるか学ぶことも重要な仕事であった。今とは違い、トゥールの少ない時代であったから、必要に応じて自ら作らねばならなかったが、それは大変よい勉強になった。趣味でもいいから自らテーマを持てと云われたことがあるが、その言葉を私は忘れることが出来ない。そのことを通して研究のプロセス、研究者の求めるもの、その心をいくらかでも知ることが出来るからであろう。これには両刃の剣の危険もあるが図書館員にとって必要なことであると思っている。

私には、私のささやかな手助けに対し、論文等が出来上って御礼の言葉をいただいた時の喜びが忘れられない。その喜びが私の仕事を支えて来たように思う。

（わたなべ　てるこ　マイクロ資料係）

昭和四十八年の学生乱入事件について

寺本　辰雄

新図書館の出発の一つの節目として、「図書館の百年をふりかえり、近い将来を考える」ための企画により、標題の事件について書くように依頼されたが、既に相当の歳月が過ぎた今では記憶も曖昧となり、事実と相違する点があるかも知れないがご容赦いただきたい。

学生の図書館乱入事件は、昭和四十八年十一月十九日夜の出来事であった。当時の学園は大学紛争もやや下火になっていたが、学生間の抗争は依然として続いていた。十一月八日には早大生川口大三郎君のリンチ事件の一周忌を迎え、各セクトの追悼集会が予定されていたが、大学は学生同士の衝突を危惧して

八日の授業を全学休講とし構内立入禁止を決定した。また、十二日から始まる早稲田祭に反発する学生の動きなどもあり、大学周辺は緊迫した雰囲気に包まれていた。この頃は図書館も緊張した毎日で、特に館員の少なくなる夜間は殊更であった。

十一月九日夜、図書館から「午後七時半ごろ突然黒ヘルメット姿の学生数人が学生入口から乱入、二階のカウンターを乗り越えて、職員の制止を振り切り出納入口から書庫内に侵入、中にいた大学院生等を追い出して内側から鍵をかけてたてこもった。至急に来て欲しい。」との連絡があった。図書館に着いたのは午後九時ごろで、すでに閉館していたが、閉じこもった学生達は、屋上から垂れ幕とマイクで「総長団交貫徹、早稲田祭粉砕、早大管理支配体制粉砕」などと、大学に対して早稲田祭の中止と総長団交を要求していた。これに対し大学は再三にわたり館外へ出るよう警告していたが、学生達は一向に応ずる気配もなく、むしろ内側から盛んにバリケードを作り抵抗の構えを見せていた。大学の要請により警視庁機動隊と戸塚署員約百人が学外に待機し、大学の決断を待っていた。

十一時二十分、機動隊が出動し「退去しないときは全員不退去罪で検挙する」旨、放送した後、大学の了承を得て図書館に入り、書庫四階（新館）に閉じこもっていた学生ら全員十四人を逮捕した。時刻は午前零時ごろであったと思う。

零時半から三時ごろまで現場検証が行われたが、鉄パイプ、鉄切り、ノコギリ、懐中電灯、固形燃料、トランシーバー、パン、缶詰、飲料水など多数が遺留品として散乱していた。

二十日は午前中臨時閉館として、バリケードの撤去、片付けなどを行ったが、バリケードの構築九箇所、使用した物は机二十三脚、ブックトラック十台、図書約五千冊、補助棚十三本、針金などであった。短時間のうちによくこれほどまで築いたものと、その手慣れた状況に驚き、周到な準備の下に実行されたことが想像できた。被害は図書の破損二十四冊、蛍光灯器具など思っていたよりも軽微で、特に図書の被害の少なかったことは、何よりも幸いであった。

当時の学生は反権力が非常に強く、機動隊を導入することには大学当局も大変苦慮されておられたが、この英断が大事を防いだのではないだろうか。図書館でも過去の大学紛争の経験から最悪の事態を想定して、今は亡き佐々木八郎図書館長は、㈠に学生の為に読書環境の維持と身の安全についての配慮。㈡に万一図書館に学生が侵入するような事態があれば説得に努め、

これに応じない場合は速やかに排除するよう示唆されておられたが、これは貴重な資料を守らねばならない図書館員の使命と利用者の立場を考えてのことであった。「新しい図書館」への期待は大きく様々であろうが、学問の環境を守り育てようとする図書館員の誠意と、日頃の研鑽への努力の成果によって図書館が評価されるものであることを忘れてはならない。図書館紀要発刊の意義もここにあると思う。

（てらもと　たつお　早稲田実業高校事務長）

コンピュータ導入へのみちのり

窪田　寛

時計を気にしながら館長室へ出向くと、すでに高宮事務長他数名が席についていた。そのときのテーマは、図書館の機械化であった。意見を求められるままに現段階では無理だとの考えを述べたところ、どうして機械化が無理なのかと、平田館長が大きな目をギョロリと光らせた。

コンピュータが高価すぎること。ラインプリンターの文字には特殊記号付きの文字がなく、米国の実験では英語の図書に限定されていたこと。MARCについての知識不足、コンピュータ利用については経験が皆無であること。などなどを説明した覚えがある。あの大きな目がギョロリとしなければ、思い出として私の記憶に残らなかったのかもしれない。

昭和四十四年度の全国図書館大会が長野で開催され、ここで国会図書館の機械化計画が発表されたが、この大会ののち、しばらく経ってからの出来ごとであった。

早稲田でのMARCとの出逢いは意外に早く、受入資料のチェックをされていた青木枝朗さんが、「これこれ」と指を差しながら米国議会図書館のブレチンを届けてくれたことに始まる。

それは、MARCパイロットプロジェクトの記事であった。内容どころか、レコードフォーマットやタグ、インディケータなど、用語そのものが皆目わからなかった頃のことである。とりあえず暗号解読まがいの解読を手掛けることになったが、数(カズ)読めば解けてくるだろうというのが当時の心境。結果として、挫折感の渋さをいやというほど味わう羽目になってしまった。

「先駆者たちは、勤務時間外に手弁当で機械化に取り組み、図書館の同僚たちから白眼視されることもしばしばあった」と

の一文が目にとまったとき、コンピュータに対するアレルギーの強さは、日米ともに、また、早稲田でも同じであると、ほっと息をついたときがある。

昭和五十四年の十一月には、オハイオ大学図書館の森田一子さんが、図書館視聴覚教室で〝OCLCとOSU〟と題する講演をして下さったが、早稲田における機械化への関心の高まりと、機械化へのアレルギーとの相剋の段階がこの頃であっただろうか。図書館では、本庄への資料の別置に備えて試行錯誤ながらもパンチカード方式で閲覧統計の作成が進められていた。

昭和五十五年。勤続年数の三分の一を部局で過して、本館へ移ることになった。

古川館長は、昼休み前に館長室から事務所へ出てこられ、決裁済みの書類を高宮事務長に渡されると、しばし腰をおろされるのが常であった。その椅子の位置は、私の席の斜め後方三メートル。つい灰皿は私のを共用することになる。きっかけが禁煙にはじまっても、全学挙げての反対意見が渦巻く本庄への別置問題、さらに飛躍して機械処置の問題、米国図書館界の動向やいかに、といった話題に波及することもあったが、読了し終えたレポートのうち、これはと思われる事例は、その都度、話の合間に披瀝したりしていた。

半年ほど経ったある日、いつものように館長室から出てこられた古川館長から、コンピュータ導入に要する経費調べにかかって欲しい、教務部長との打ち合せは終っているから、との申し渡しを受けた。今日はお茶飲み話ではないと思ったその瞬間、ドキッとするものを感じた。

私の心に潜むコンピュータ・アレルギーのなせるわざであったのか、はたまた、気合がなせるわざだったのだろうか。オフィス・コンピュータのレンタル料は人件費一人か二人分の時代に差しかかっていたのである。

（くぼた　ひろし　在職昭二七～六一）

企画広報係の誕生

――はじまりは「企画広報って何?」だった

金子　宏　二

企画広報係が当時の管理課に係として誕生したのは、昭和六十年六月のことである。当時の係員数は六名で、現在の同係とくらべると規模も大きかった。縮小したのは、昭和六十三年

に、総合学術情報センター開設準備室が設けられ、それまで企画広報係の中心的な仕事であった新館準備の業務が分離したことによる。新館準備のハード部分は、切離して効率的に処理する方がよいのはいうまでもない。しかし、現在そして今後も頻繁に起るであろう、全館的なプロジェクトや、将来計画などの事務局を果す組織がますます重視されるであろう。

係として独立する前に、二年の前史がある。昭和五十八年六月に、図書館の組織の改革がおこなわれた。それは、受入係を解散し、その事務を各資料毎の整理部門に付属させたことと、管理課総務係の中に、企画広報担当グループを設けたことである。

整理課和漢書係から移った私と閲覧課から来た滝波、細川、仁上の各氏、総務係の窪田寛氏で〝企画広報担当〟としてスタートした。

図書館に職を得て二十年近く、その殆んどが資料とともにあった私にとって、晴天の霹靂であった。企画とは?広報とは?未知の分野に踏みこむ前の好奇心と不安が交錯した。

その年の異動は六月十五日に実施されたのだが、企画広報としての仕事が軌道に乗るまで夏一杯かかったといってよい。ご存知の方ならメンバーの顔ぶれを見てお気付のことと思うが、一騎当千の強者、論客ぞろいの集団である。活発な論議が〝広報のあり方〟〝企画活動のあり方〟をめぐり交されたのである。

濱田館長、矢澤事務長、千葉管理課長を交えて、毎週のように企画広報の任務について構想を聴いて意見を交した。その結果、私達に課せられたものは、第一に新図書館建設計画の推進、第二に広報の見直しと新広報誌の発行、第三に電算化システム計画の立案、その他館内各部署が抱えている課題の総ざらいなどであった。総務係の持っていた印刷・製本と統計・調査の業務も引継いだ。

三本の柱の具体化のために、従来の館内長期計画委員会を大改革し、ここまでの討議を受けて館としての意志決定をおこなう方針が決まった。広報と電算化計画の小委員会が設けられ、その検討結果が、館内広報の見直しと『蔦』の紙面刷新、『らいぶとびあ』、『ふみくら』の発刊、日常的な広報『館内広報』の発行など、今の広報システムの原型が作られた。電算化計画については、基本構想の策定後、学術情報システム準備室に移っていった。

新館準備については、その後のワーキング・グループ活動に

発展、基本構想―基本計画―基本設計へと進展していくのである。長期計画委員会の事務局として、これを推進した私達としては、計画どおり運べば、今年（昭和六十三年）四月オープンする筈であった新図書館での業務に思いを馳せながら、残業も重なるかなりハードなスケジュールを消化していった。

その後、建設予定地の問題で計画が遅れてしまった。人事異動がこの間にあったりして、当時のメンバーで昭和六十三年現在企画広報に居るのは細川主任だけである。

ワーキング・グループ活動当時のことには、思い出すことが多々ある。この準備期間も含め楽しくもあり胃の痛むこともあり、悲喜こもごもであった。しかし、この運動のフィーバーぶりは、学内の他の箇所からも熱い目で見られていた程であった。小集団活動としての運動の側面も含め、相互に啓発しあう場としても有効であった。課、係での仕事を越えて他の館員と共同作業をすることで、ふだん交流のない人を識る機会が生じ、活性化への一助にもなるなど、有形無形の効果をもたらしたといえよう。

そのほか、各種展覧会の企画、本庄分館の開設、投書箱の実施、地下倉庫の改修、全館員集会や館員旅行の実施などなどが、企画広報としておこなった仕事である。

業務上で大きな変化を与えたのは、各種機器の導入である。印刷機、丁合機、電動ホチキスなどである。印刷、丁合、製本などに、格段のスピードアップが出来た。ＮＥＣの端末も有難かった。

記したいことは多々ある。最初に述べたことだが、各種の図書館活動の要として、企画部門が位置づけられる必要があろう。ややもすれば、日常のルーティン・ワークをその部門の内に取りこんでしまい、本来の企画業務が出来なくなってしまう事態を生じる。その辺のところの難しさは、私自身も痛感している。企画業務のあり方について、今一度検討してみたいと思っている。

（かねこ　こうじ　閲覧二課長）

図書館と演劇博物館

林　京平

早稲田大学図書館と同演劇博物館の関係は、その育ての親であり生みの親ともいうべき市島謙吉（春城）と坪内雄蔵（逍遙）

との親密な関係をおいては考えられない。

この二人は明治九年（一八七六）東京開成学校（翌十年に東京大学と改称）に入学、十一月には寄宿舎に入るのだが、逍遙の隣室には高田早苗（半峰）がいた。早稲田大学の創立及び発展の推進力をなした三人が親しい同窓であったということは、まことに奇縁というべきだろう。

市島は、『春城八十年の覚書』のなかでこの大学時代の思い出をのべているが、逍遙と共に下谷で痛飲し、夜明けまで歩こうと銀座へさらに引き返して九段まできたが夜は明けず、靖国神社の燈籠の下で一休みする内眠ってしまった。足音で気が付くと夜が明けていたという。

逍遙は明治十二年七月に、夏休みで名古屋の笹島の家へ帰省していた。その逍遙を旅行の途中の市島が訪ねた。逍遙は得月楼というなぎ屋で市島を歓待している。市島にとっては忘れ難いことだったらしい。後年自らが演劇博物館設立の発起人委員長として、募金の為に名古屋へ出掛け、その折にも逍遙の生誕地太田を木曾川を下る船から眺めて友を思い、名古屋では得月楼で五十年以前を想起して酒宴を張った。席上逍遙に書を送ってこの日の事を報告している。

逍遙は大正九年に熱海に別荘双柿舎を造営、以後折りある毎に熱海に滞在するようになる。ことに年末から年初にかけては双柿舎にあることが常となった。その逍遙のもとへ年初高田と市島はよく訪れた。それが恒例化したのは、大正十二年からではなかったか。

その年一月三日の逍遙の日記に「市島春城、會津八一来訪、八日まで滞在。」とある。大正十三年一月には「半峰春城の両兄をわが熱海の山荘に迎へて写真をとらせける時」として

あるじまうけなき宿ゆゑにあたゝかき冬日のみこそ君をもてなせ

ふゆさりて人目かれぬる山里も君をむかへて春めきにけり

まゐらせむいへづともなし老い柿の影をだにこそとりていねと友

などと詠んで率直にその喜びを表している。

市島は明治三十五年、東京専門学校が早稲田大学と組織をかえた時から、大正六年まで図書館長としてその内容の充実に尽くした。ひとり早稲田のみならず日本の図書館行政の中心となってその発展に寄与した。明治四十一年には日本図書館協会の初代会長に推されたのも故あってのことである。

市島が館長在任中に十余回も大きな展覧会がひらかれている。大正二年は、大学の創立三十周年に当たり、この時「江戸美術展覧会」が開催された。出品されたものは三百二十八点に及ぶ浮世絵で、すべて小林文七の所蔵品であった。

浮世絵の収集家として知られる小林文七は、浅草の住で市島館長とはよく知る仲であったとか。それもあって、この展覧会は肉筆、版画から版本、さらには海外に於けるものまでも含めた浮世絵に関する研究書、目録にまで及ぶ大規模なものとなった。まさに三十周年の記念展にふさわしいものであった。

さてその小林文七が、大正五年十二月に二万枚程の浮世絵の芝居版画を手放すことになった。逍遙はこの頃から歌舞伎史の画証として芝居版画を重視し、自身その収集を行っている。小林のこの大量の芝居絵はまさに垂涎のものであった。逍遙は親友の市島に相談して、早大図書館でこれを購入して貰うことにした。

逍遙の手控帳「大正五年十二月末、大正六年一月」と表記した小冊子に「未来の仕事」として記された十三項目のメモがある。その六番目に「舞台画（劇画）論――演劇博物館設立案――浮世絵と劇画」とある。浮世絵の大量購入、それは大正九年の『芝居絵と豊国及び其門下』や、昭和六年の『歌舞伎画証史話』というユニークな研究として成果をみせているが、もう一つこの芝居絵の保存と展示を一つの目的とした演劇博物館構想が、逍遙の胸中にすでにイメージされていた。

大正十二年十月にも演劇展覧会が企画された。その第三回目の相談会は九月一日に行われた。図書館の日誌には「午前十時於大隈会館、演劇展覧会の相談あり、出席高田　坪内　市島　伊坂　黒須　小林　坪内大　深沢　片山の諸氏也　正午一同にて食卓につき食事を始めんとするに際し非常の強震あり（下略）」とある。例の関東大震災である。演劇展覧会のために用意されていた資料は灰塵と化した。早稲田で購入したものは別として、小林文七の誇った浮世絵コレクションも灰となった。

逍遙はこの時の所感を

大なゐゆり大き火もえて幾代々の人の力の跡かたもなき
いしずゑゆ築きなほすとなゐせしか人のしわざを人のこゝろを

たかぶれる人の心とそゝりたちし石の高どの微塵となりぬ

などと詠じ、大自然の前に人の業のいかに微弱であるか、そして第一次大戦景気で有頂天になっていた人々に対する天の戒め

と強く感じたのであった。

逍遙の大正十二年九月五日の日記に「蔵書一切を大学へ寄贈の手続をなし、約三分一を車送す」、六日には残りすべてを図書館へ運びこんでいる。この大震を経験して、逍遙は大切な蔵書を手元に置いて、万一の災害の時に焼失してしまうことは、取り返しのつかない損失と考え、これを安全で且つ多くの人の利用できる図書館へ寄贈したのだった。同時に恐らくすでに六年前に抱いていた、演劇博物館設立の思いは、一層強固となったに違いない。この寄贈に際して

なまじひの心の糧を断ちてこそまことのわれは生くべかりけれ

心将たありし浄らに帰るべきときは来にけり借着をしぬがむ

とその心情を歌に託している。

大正十四年には新図書館が開館した。この年十二月の『早稲田学報』誌上に、市島名誉理事は「早稲田大学図書館に一特色をもたせたき冀望」(演劇図書館を開くの議)という意見を述べている。あの大震災によって多くの資料を失ったが、まだ演劇に関するものは豊かである。災害のことを考えると、是非これを集め研究に供する博物館なり図書館が必要である。幸いに震災前に小林文七から購入した芝居絵があり、逍遙が居ることによってこの図書館には比較的に演劇に関する図書も多い。殊にシェイクスピアその他の演劇関係の洋書まである。だから図書館の一隅に演劇図書館を作って、その道の研究者の便をはかるべきだというのがその要旨である。

逍遙の構想とは食い違いはあるが、意図そのものは市島と一致している。同じ頃逍遙の古稀と『シェークスピヤ全集』完成を記念、昭和三年を期して演劇博物館を設立しようという、設立準備会が文科校友会有志によって開かれた。大正十五年十一月十四日のことである。同二十四日の大学側との会合では、大隈会館区域に建てることと、予算は十五万ということが話し合われている。

しかし、当時大学の大隈記念事業と重なって、その素案も結局は図書館の上に一階だけ増築して、展覧場にしようという縮小案となってしまった。逍遙はこれでは満足しなかったので、明けて昭和二年の正月、例年の如く双柿舎を訪れた市島に、この計画の中止を申し入れている。文科校友会有志は、この事情を知り、四月に入ると逍遙の本意に添うべく活動を開始し、五

月三十日には設立発起人会も組織され、委員長は市島と決まった。昭和三年十月に向けて募金運動が開始されたわけで、その趣意書には建設の意義はもちろん、由来、構造、機能などの説明に加えて、資料として当時図書館で保管中の浮世絵（前記小林文七のものに加えて逍遙が収集したもの）、図書二千五百冊、歌舞伎台帳五百余部二千冊、役者評判記二八八冊、番付類約六千、逍遙寄贈の絵看板五七、図書五六五七冊などが記されている。

演劇博物館はこうして十月二十七日に開館するが、その開館記念展は「《忠臣蔵》に関する展覧会」で、お手のものの「忠臣蔵」の芝居絵を中心に展示された。十月十五日からその準備にかかっているが、それは図書館階下の閲覧室を借りて行われた。開館当日は図書館から小林主事ほか五名の図書館員が、手伝いとして派遣されている。

二十一世紀に向けて図書館は前進の第一歩を踏みだした。早稲田大学が東京専門学校として船出したときに、高田は「兎に角一番先きに図書館を造る、相当な図書館が出来れば大学が出来たと同じである」（「図書館の開館式に莅んで」早稲田学報大正一四・一一）と考えていた。その理想のもとに早稲田大学図書館はスタートし、名館長を得て磐石の基礎が築かれた。その基盤あってこそ、演劇博物館もありえたといってもいいだろう。演劇博物館は昭和六十三年で丁度開館六十年。先覚たちの開拓の努力を今改めて想起し、新しい出発の糧としなくてはならない。

（はやし　きょうへい　演劇博物館員）

會津記念室と図書館のかかわり

服部匡延

會津記念室、正しくは會津博士記念東洋美術陳列室と図書館のかかわりについて、私のいわば自分史に沿った、それも記憶にある範囲で書かせていただきます。その上で申しますと、両者のかかわりには大きくいって二つの局面があったといっていいのではないかと思います。一つは會津記念室が一時期、図書館の一角に居候していたこと。もう一つは、その後天下晴れて独立したその記念室の今度はその一角を、図書館が寄贈された同記念室創設者會津八一博士の旧蔵書の本格整理の場にしたこ

と、この二つです。そしてその二局面の両方にまたがって顔を突き出していたのが、実はこれを書いているこの私というわけです。

とは申せ、二次大戦による本大学罹災の余波をかぶってその居場所を喪失した會津記念室が、図書館二階貴賓室（いまのコピー室）を提供されて臨時の蔵品陳列室となったのが昭和二十三年。私がこの部屋へ通いはじめたのはずっとおくれて同二十六年のなかば頃からですので、そのあいだのことは知りません。しかし、そのときから會津記念室が館外へ転出する同二十九年秋までの約三年間、日とともに通いつめるようになり、それにつれて図書館の書物に親しみ、業務の内容も垣間み、一部の館員方との交流も深くなって行きました。このことは「図書館の仕事」の範囲外のことではありますが、しかしこうした小さい歴史が次ぎのステップ、つまり會津博士旧蔵書、つまり「會津文庫」の整理業務に参加することになる伏線と考えている私にとっては、はなしの便宜上触れておきたかったわけです。

新會津記念室はいまの第一学生会館の棟奥一、二階に移転、開館しました（昭和二十九年十月）。その年の十二月、この記念室を視察された會津先生は翌々三十一年十一月二十一日にお亡くなりになります。その後、會津先生の御養女（われわれは親しみをこめて「蘭子さん」と呼んでいました）と図書館とのあいだで、主として記念室のぬしでありわれわれの師でもあった安藤更生（諱は正輝）先生が中に入られて、會津先生旧蔵書群の処置について話合いがあったわけです。しかし、このことについては、当時院生だった私は局外者の立場でしたので、くわしいことは分りません。ともかく昭和三十三年中に、この會津先生旧蔵書の寄贈を図書館が受諾することに決り、その年のうちに大量の図書が、ここ會津記念室に搬入されたと記憶しています。

まず記念室一階一番奥の安藤先生居室を空けて書庫とし、一つおいて手前にある講義室を整理作業場に充てて、この「會津文庫」の整理が開始されました。主として故中沢保司書の遠隔監督下に、私を含む記念室常連の院生たちがアルバイトしました。このとき、以前私が図書館の「業務も垣間み」「館員方との交流も深」めた経歴がものをいいましたし、それに当時は私が大学院最上級生でもあったので、暗黙のうちに小ボスとなって作業を進めました。こうした態勢の裏には、會津先生七回忌（昭和三十六年）までには整理を完了させようという大きい意

志が働いていたこと、しかし当時図書館においては、そのための専任の司書、専用のスペースが割けないという事情があったからだろうと思います。

いずれにせよわがグループは一所懸命整理にはげみ、日ならずして前段階――カード作成・蔵書印押印・ラベル貼付など――を完了したはずですが、実ははっきり憶えていません。しかし、その結果は図書館の手でおこなわれた後段階、つまり冊子目録作成の完了によって厳然たるかたちを得ています。すなわち「早稲田大学図書館文庫目録第三輯　會津文庫目録」（昭和三十七年十一月二十一日刊）がそれです。発刊日付はぴたり會津先生の七回忌に当っています。

これ以後は、私の知る限りでは「會津博士記念東洋美術陳列室と図書館」との顕著なかかわりはなかったように思います。

最後に蛇足ですが、この整理作業がまたまた伏線となって、オーヴァー・ドクターの先駆的存在であった私は、會津記念室主任安藤教授のお口利と図書館の御好意によって昭和三十六年、図書館専任になることができた次第です。

（はっとり　まさのぶ　在職昭三六～五三）

大学史編集所と図書館

佐藤能丸

大学史編集所と図書館は、ともに大学の付属機関であるが、編集所の源は昭和三十六年に図書館内に設置された校史資料係にある。早稲田大学に関する歴史的資料の蒐集・保存を業務内容とするこの係の創設は、当時の大野實雄館長の発起によるもので、当初大学の本部にこうした箇所の設置を提案したところ、消極的であったため、図書館独自の施設として発足することになったという。この資料係の担当館員はたった一人で、当時書記であった高野善一氏が配属された。

翌三十七年は、創立八十周年記念に当り、この機会を活用して、大野館長は『早稲田学報』十月号以下に数回にわたって、「校友各位へのお願い」と題して、母校の歴史に関する多方面にわたる資料の提供を各地の校友に積極的に訴えた。こうした資料蒐集と併行して、この間、天野為之生誕百年記念展（三十六年十一月）、創立八十周年記念展（三十七年十月）、大隈重信

生誕一二五年記念展（三十八年十月）が校史資料係の担当として行われた。

やがて、大学の本部では、大野館長の慧眼に触発されて、校史資料係を図書館から分離して本部の機関とする措置を構じた。即ち、三十八年十二月五日の理事会は、この係を校史資料室として設置し、理事会の下において総長が統括する機関とした。そして、その目的を、「本大学の歴史および創立者大隈重信の事績に関する資料の蒐集、整理、保存並びにその研究をなすこと」とする「校史資料室設置要領」を決議し、その事務は当分の間、教務部で行うことにしたのである。目的の中に、「大隈重信の事績」を入れたのは、この年七月に「大隈記念社会科学研究所」が改組されて「社会科学研究所」となったのに伴い、その大隈研究部門を引き継ぐことになったからである。

このように、図書館の校史資料係は校史資料室に昇格して図書館から教務部所管の総長直轄の機関となった。しかし、その所在自体は、図書館の旧館長室に置かれたままであった。校史資料室の設置に伴い、研究部門では、大学史研究を『早稲田大学八十年誌』を執筆した中西敬二郎、大隈研究を木村毅・高垣寅次郎他三名の計六氏が三十九年一月一日付で嘱託として嘱任

され、資料整理部門では高野善一氏が四月十八日付で図書館から出向する形で引き続いて担当することになった。

校史資料室は、この後、本部の機構改正により四十年一月に総長室が設置されたのに伴い、その中に秘書課・校友課・企画調査係とともに校史資料係として置かれ、更に四十四年六月一日付をもって、総長室の中に置かれたままで、名称を大学史編集所と改称した。これは近々に独立した付属機関とすることを含みとした改称であった。即ち、四十五年一月に小松芳喬政治経済学部教授が初代所長に任命され、その基礎づくりに尽力することになった。次いで三月六日の理事会で、「大学史編集所規程」が決定され、四月から名実ともに新発足することになった。この発足時の事務長は坂井秀春氏で、その後坂井氏の定年退職に伴い、五十六年六月から図書館の北川幹造氏が後任となり、次いで六十三年六月から関田かおる氏が就任して現在に至っている。編集所が発足して一ヵ月後の五月に、本部が現在の政治経済学部校舎から現在の一号館に移転したのに伴い、編集所もそれまでの図書館での仮り住居から本部の二階に移転した。更に六十二年七月末、現在の二十七号館〈診療所・学生相談センター〉の二階に移転し、今日に至っている。この間学園

闘争があり、学生による本部乱入が数回あったが、編集所には何ら被害はなかった。

ところで、校史資料室が開設され、図書館から分離したことに伴い、図書館から移管された資料というものは、それほど多くはなかった。最もまとまったものは写真類で、大隈家旧所蔵の原版写真くらいのものである。その後独自に蒐集複写した写真を併せて、現在編集所が所蔵する写真は約七千枚である。また、図書館から所在が離れたため、大学史編纂の基礎資料として学苑に直接関係する図書館所蔵の第一次『中央学術雑誌』、『専門学会雑誌』、『公友雑誌』、『同攻会雑誌』、第二次『中央学術雑誌』、『中央時論』、『早稲田学報』を順次マイクロ化してCH版で複製した。従って、図書館所蔵の早稲田大学関係図書（分類ト10）を編集所に移管することはなく、編集所では、使用頻度の高い図書を随時複製化するという方法をとっていった。こうした図書を一部に含み、全国の国公私立大学の百年史類や大学教育関係資料および日本近現代史の研究書を主とする編集所の蔵書は『早稲田大学大学史編集所蔵書目録』（昭和五十六年三月刊）にまとめられている。

なお、図書館と編集所の所蔵品の中で、最も密接に関連する貴重な資料は、大隈家から大学に寄贈された大隈文書である。図書館特別資料室所蔵のものは『大隈文書目録』（昭和二十七年十月刊）、『大隈文書目録補遺』（昭和五十年二月刊）に整理され、戦後二回にわたって寄贈され編集所が保管しているものは「大隈信幸氏寄贈品ニ就イテ」（『早稲田大学史記要』第一巻第一号、昭和四十年六月）、「『大隈信幸氏寄贈文書』目録」（同誌、第一二巻、昭和五十四年三月）にまとめられており、大隈家旧蔵の資料の全貌はこの四種の目録によって初めて窺うことができるようになっているのである。この他に、図書館所蔵の「文庫」に類する編集所の資料の内、目録化されている（『早稲田大学史記要』に掲載）特殊資料としては、「大隈重信論著目録㈠～㈢」（第六巻～第八巻、昭和四十八年～五十年）、「教務課より大学史編集所に移管された東京専門学校・早稲田大学本部書類」（第七巻、昭和四十九年）、「教務課より大学史編集所に移管された早稲田大学本部書類（続）」（第九巻、昭和五十一年）、「第一早稲田高等学院関係資料目録」（第十一巻、昭和五十三年）、「浮田文庫仮目録」〈浮田和民〉（第十五巻、昭和五十七年）、「小野梓関係資料目録（文献編）ならびに小野梓研究文献目録」（第十六巻、昭和五十八年）、「木村毅蒐集ホセ・リサール文庫」（第十七巻、昭和六十年）がある。又、図

書館の視聴覚資料係収蔵の録音資料に類するものとして、大正期以降の大学関係者による学苑経営やさまざまな事件あるいは人物回顧などの貴重な証言を記録した録音テープが百余件ある。これらの内、本部書類と録音テープは一般公開されてはいないが、録音テープは随時活字化されて『早稲田大学史記要』に紹介されている。

このように、早稲田大学の歴史に関しては、図書館と編集所双方の資料を併看しなければならないが、最近ではこの他に教務部学籍担当の書類も重要な大学史資料として活用されており、今後は、戦後の大学史編纂の上からも、特に世界的規模のもとに展開された大学闘争の関係資料の面からも、昭和四十五年に設置された教務部調査担当の大学問題研究資料室との連携も必要になってきている。

（さとう　よしまる　大学史編集所嘱託）